

令和 6 年度

在学生・教職員

# I C T 総合アンケート調査結果

## [報告書 抜粋]

国際高等専門学校

## 令和6年度 ICT アンケート調査結果について

ICT 総合アンケートおよび ICT 授業アンケートは、教職員を問わず貴重な意見収集の手段となっており、1年間の教学成果や学事運営の振り返りと自己評価に必修の資料である。ここでは、2つの調査結果から FD 会議、学務会議および教員会議等において議論が必要と思われる内容のごく一部について引用した。

ICT 総合アンケートにおける「ICT の満足度」の年度別比較において、令和3年度（2021 年）の 55%から令和5年度（2023 年）に 90%と過去最高になった。このことは学事運営を含めた ICT の教育全体が学生および教員から評価されている証左である。今回の調査では令和5年度を 3.5 ポイント下回ったが、依然として高い満足度であり、この結果を維持するための努力が必要である。「ICT 学生であることの誇り」についても令和3年度（2021 年）の 40%からこの2年間（R5（2023）～R6（2024））で 80%近くまで上昇しており、同じく、この状況を維持することが求められる。一方、学校での過ごし方の比較では「カフェテリアの食事」に関してのみマイナススコアとなっている。この結果は前年度調査でも同様であり、喫緊の改善課題であるといえる。

ICT 授業アンケート（授業調査分析報告書）では、基本的集計（全項目）の年度別比較（加重平均）においてすべての項目が令和5年度（2023 年）よりも低下している。特に「教員の説明や教え方は分かりやすかった」の項目が前年度より -0.59 と大きく下がっている。この点については FD 会議、学務会議および教員会議において議論する必要がある。「科目についての全項目比較」では、すべての項目で共創科目（エンジニアリングデザイン）が共創科目以外よりも高い値を示しており、ICT のものづくり教育が学生から受け入れられていることがわかる。

教職員各位には調査結果の詳細について報告書を一読していただき、今後の教育や学生支援および業務等の改善の一助としていただきたい。最後に、アンケートに協力していただいたすべての学生、教職員および関係者の皆様方に感謝の意を表します。

令和7年11月  
国際高等専門学校  
校長 鹿田正昭

## The Results of the ICT Surveys for AY 2024/25

The ICT Class Evaluation Survey and the General Survey are invaluable tools for gathering feedback from both faculty and staff members. They are essential resources for reviewing and self-assessing the academic achievements and administrative operations of the past year. In this section, I have highlighted a small portion of the survey results that merit discussion in FD meetings, Executive Council meetings, and faculty meetings.

In the year-on-year comparison of "Satisfaction with ICT" in the General Survey, the figure rose from 55% in AY 2021 to a record-high 90% in AY 2023. This demonstrates that ICT education, including academic administration, is highly valued by both students and faculty members. Although this year's survey shows a slight decline of 3.5 points compared to AY 2023, satisfaction remains high, and continued efforts are necessary to maintain this level. Similarly, the sense of pride in being an ICT student has increased significantly—from 40% in AY 2021 to nearly 80% over the past two years (AY 2023 to AY 2024). This positive trend must also be sustained. On the other hand, in the comparison of campus life aspects, only "Cafeteria meals" received a negative score. This issue was also noted in the previous survey and should be considered an urgent matter for improvement.

In the ICT Class Evaluation Survey (analysis report on class evaluation), the weighted average comparison of all items across academic years shows a decline in every category compared to AY2023. Notably, the item "The instructor communicated clearly and was easy to understand" dropped significantly by 0.59 points from the previous year. This matter requires discussion in FD meetings, Executive Council meetings, and faculty meetings. In the comparison of all items by course, all indicators for the co-creation courses (Engineering Design) scored higher than those for other courses, indicating that ICT's hands-on-oriented education is well received by students.

I encourage all faculty and staff members to review the detailed findings in this report and use them as a reference for improving education, student support, and administrative operations. In closing, I would like to express my sincere gratitude to all students, faculty, staff, and all parties involved who cooperated in these surveys.

November 2025

International College of Technology, Kanazawa

Masaaki Shikada, President

1)調査の目的

- 本調査は下記の目的に従って実施した。
- 本調査は国際高専 (ICT)の現在の状況を把握し、今後の教育改善を考えるための情報を収集することを主目的とする。
- この調査企画では、在学生と教職員に国際高専の評価を聞き、各々の意識の違いを見いだすことで、今後の学校づくりを考えるためのヒントを得ることも目的とする。
- 国際高専のカリキュラムは、3年次でNZ留学となるため、その期間は調査の対象外としている。
- 本調査は平成15年度 (2003年度)から続いているが、平成30年度 (2018年度)から「国際高専」となり質問を見直したため、経年変化はそれ以降の比較となっている。また、教職員向けの質問は、一部は内容の見直しを行っているが、最長では平成15年度 (2003年度)から継続し、比較している質問もある。

2)調査の概略

項目	内容	
調査概略	調査票による自記入式調査とし、すべて無記名式とした。	
総回答数	学生:47サンプル、教職員:30サンプル	
調査方法と回収数	在学生	・有効回答数 1年次:12サンプル、2年次:20サンプル、4年次:6サンプル、5年次:9サンプル ・各クラスで配布し、回収した。配布&回収:令和7年(2025年)1月24日～2月4日
	卒業生	・今回は実施せず。
	教職員	・有効回答数 30サンプル ・各教職員に配布し、回収した。配布:令和7年(2025年)2月21日、回収:令和7年(2025年)3月7日
	企業担当者	・今回は実施せず。
調査主体	学校法人 金沢工業大学	
集計	有限会社 アイ・ポイント	

### 3)集計に関して

分野	注意点
加重平均に関して	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各調査項目を属性毎に比較するため、加重平均値を多く活用している。</li> <li>・今回の調査では、選択肢を「そう思う～どちらかといえばそう思う～どちらかといえばそう思わない～そう思わない」などのように4択式で構成した。なお、「あてはまらない、分からない」は無回答として処理した。</li> <li>・加重平均は上記の選択肢に、+10点、+5点、-5点、-10点を掛けて、回答者数で除して算出した。従って、最高点が10点で最低点がマイナス10点となる。</li> <li>・「あてはまらない、分からない」「無回答」は回答者数に含めていない。</li> </ul>
グラフに関して	<ul style="list-style-type: none"> <li>・折れ線グラフは主に時系列変化を見る際に利用されるが、この報告書では加重平均を属性毎に比較する際に本来の棒グラフでは見にくくなるため、折れ線グラフで表現しているものもある。</li> </ul>
誤差に関して	<ul style="list-style-type: none"> <li>・報告書内のデータの「集計値」や「合計値」は小数点第1位までの表示となっているが、これは小数点第2位を四捨五入したものとなっている。「肯定的な意見の合計値」なども、このルールに従っているため、「集計値」と「合計値」の四捨五入の判断が異なり、最大で0.1の差となっているケースもあるが、これは誤差として、そのままとしている。</li> </ul>

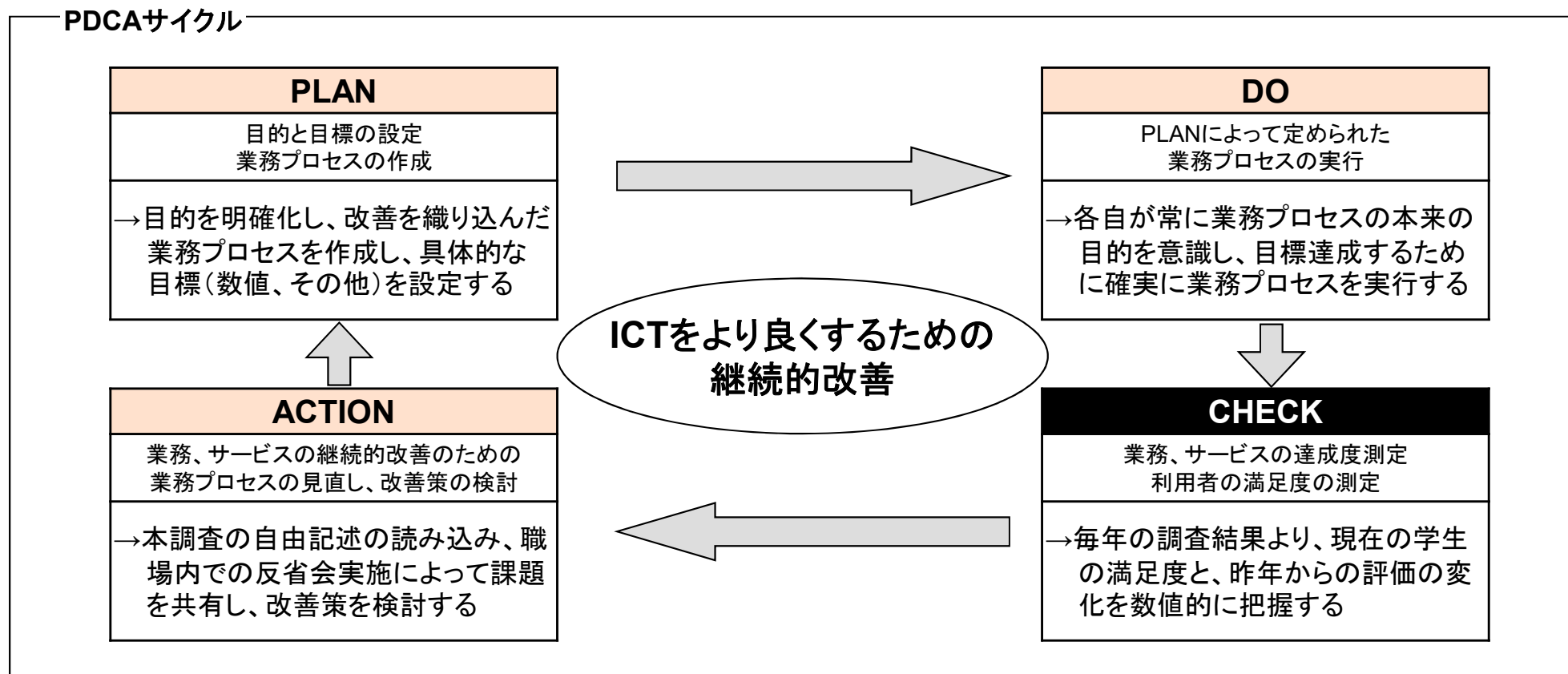
### 4)回答者数に関して

	H30年度 2018年度	R1年度 2019年度	R2年度 2020年度	R3年度 2021年度	R4年度 2022年度	R5年度 2023年度	R6年度 2024年度
1年次	10人	10人	12人	9人	17人	21人	12人
2年次	—	12人	9人	10人	8人	18人	20人
3年次	—	—	9人	6人	実施せず	実施せず	実施せず
4年次	—	—	—	9人	6人	9人	6人
5年次	—	—	—	—	6人	6人	9人
卒業生	—	—	—	—	—	—	—
企業 担当者	実施せず	実施せず	実施せず	実施せず	実施せず	実施せず	実施せず
合計	10人	22人	30人	34人	37人	54人	47人

	H15 年度 2003 年度	H16 年度 2004 年度	H17 年度 2005 年度	H18 年度 2006 年度	H19 年度 2007 年度	H20 年度 2008 年度	H21 年度 2009 年度	H22 年度 2010 年度	H23 年度 2011 年度	H24 年度 2012 年度	H25 年度 2013 年度	H26 年度 2014 年度	H27 年度 2015 年度	H28 年度 2016 年度	H29 年度 2017 年度	H30 年度 2018 年度	R1 年度 2019 年度	R2 年度 2020 年度	R3 年度 2021 年度	R4 年度 2022 年度	R5 年度 2023 年度	R6 年度 2024 年度
教職員	50人	56人	48人	50人	52人	59人	53人	62人	55人	55人	48人	59人	44人	49人	58人	64人	59人	56人	51人	38人	36人	30人

## 5) PDCAサイクルの中での本報告書の位置づけ

本報告書は下記のような業務改善の流れの中で、CHECKステップに位置づけられる。

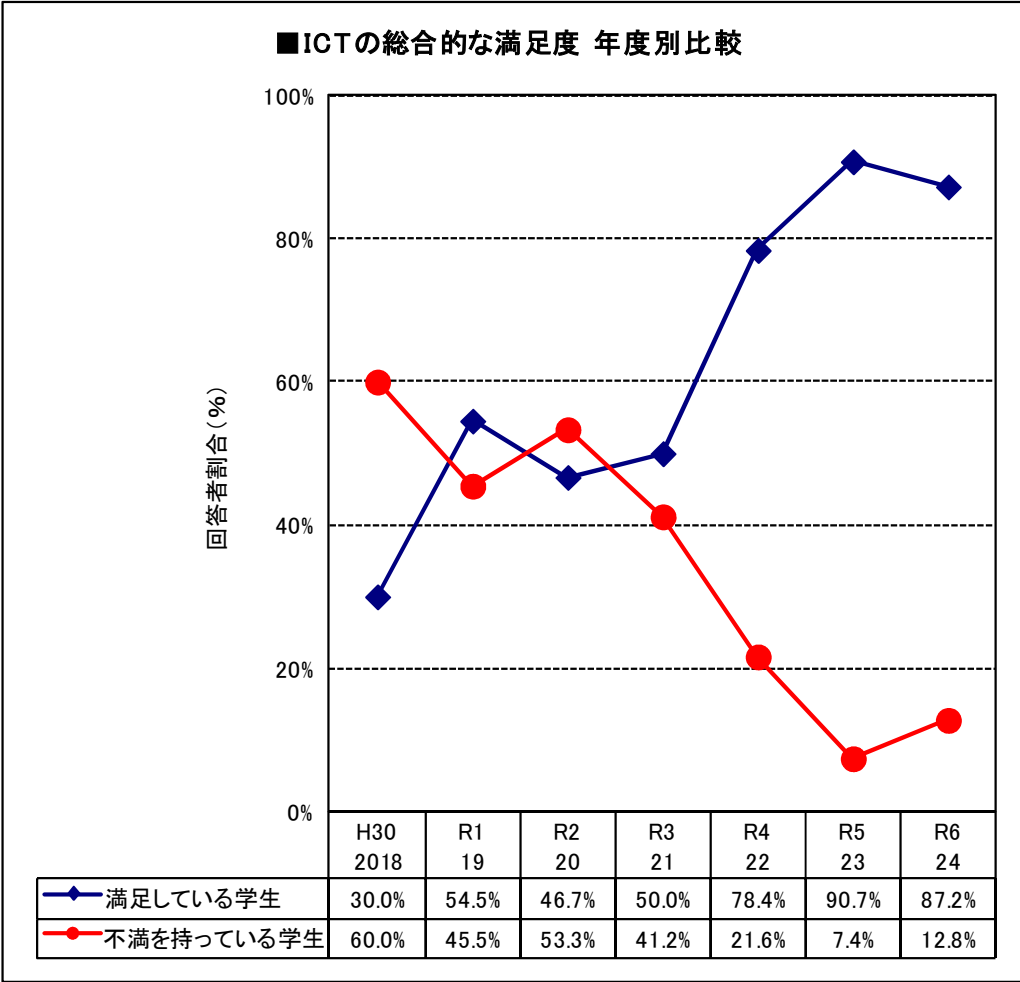
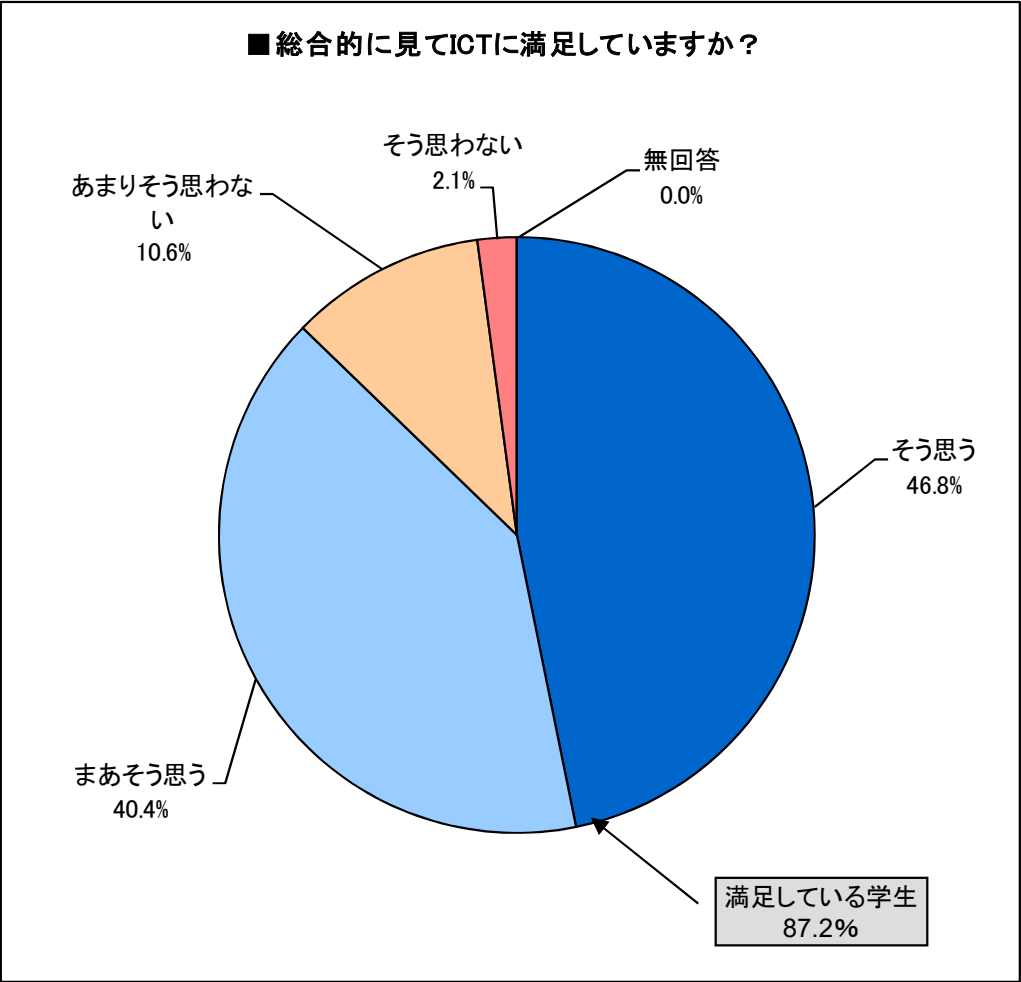


- 今回の調査によって得られた「学生の満足度」は、上記「PDCAサイクル」の中の「CHECKステップ」に相当する。
- この報告書で得られた結果はあくまでもアンケート結果を統計的に分析し、その結果に妥当と思われる理由をつけ加えた「仮説」であり、その検証と活用は今後の「ACTIONステップ」で行うことになる。
- また、ここで得られた数値的な結果を解釈し、国際高専の改善に役立てるのは、実際に現場で教育や学校運営に携わっているメンバーが行うことであり、この報告書はその参考として位置づけられるものである。
- 「PDCAサイクル」は一時的なものではなく、継続的な改善を目指すものである。従って「昨年と比較して評価がどう変化したのか?」「自らが設定した目標は達成したのか?」といった変化を見ることが主眼となる。
- 本報告書は、上記のような位置づけを継続していくことで、国際高専の改善に資することを目的としている。

1)ICTの総合的な満足度

- 「総合的に見てICTに満足していますか？」に対しては、「そう思う」が46.8%、「まあそう思う」が40.4%と同程度であり、合わせると87.2%が満足という回答となっていた。一方、「あまりそう思わない」は10.6%、「そう思わない」は2.1%であり、不満という回答は合わせて12.7%であった。
- 年度別の比較は、H30(2018年度)が「1年次」のみ、R1(2019年度)が「1～2年次」、R2(2020年度)が「1～3年次」、R3(2021年度)が「1～4年次」、R4(2022年度)以降は「3年次以外の4学年」の回答となっており、対象となる学年が異なるので比較は難しいところではあるが、今回は過去最高であった前回は3.5ポイントとわずかに下回っていた。

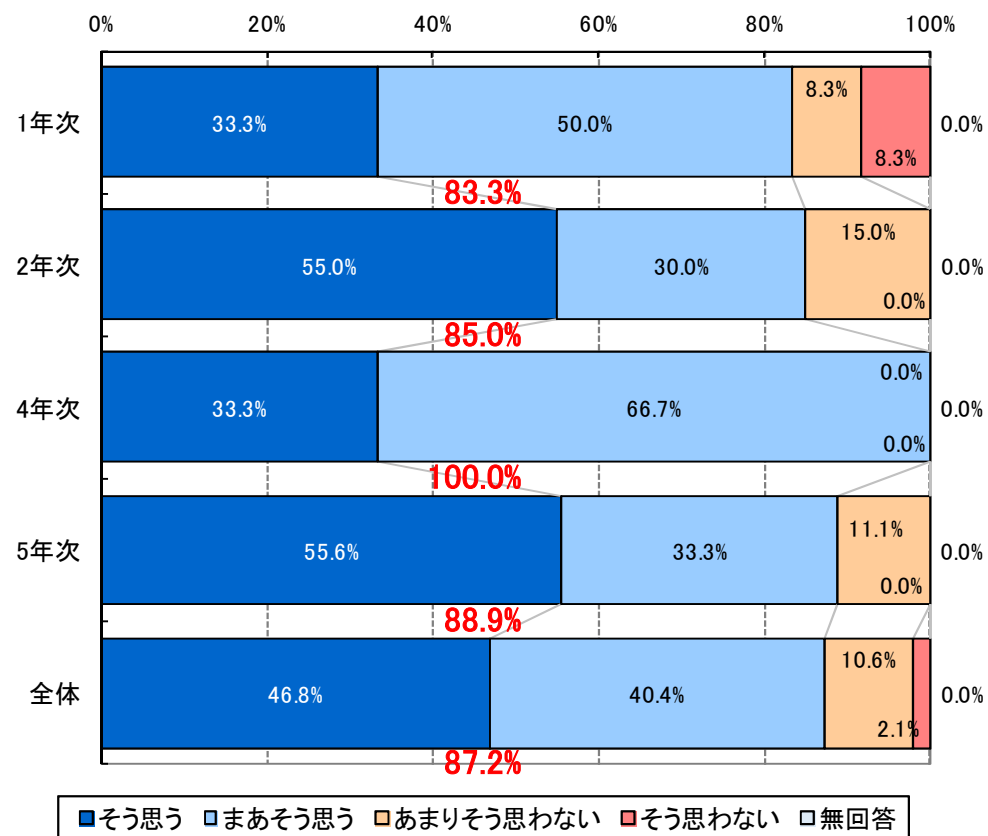
※報告書内のデータの「集計値」や「合計値」は小数点第1位までの表示となっているが、これは小数点第2位を四捨五入したものとなっている。「肯定的な意見の合計値」なども、このルールに従っているため、「集計値」と「合計値」の四捨五入の判断が異なり、最大で0.1の差となっているケースもあるが、これは誤差として、そのままとしている。



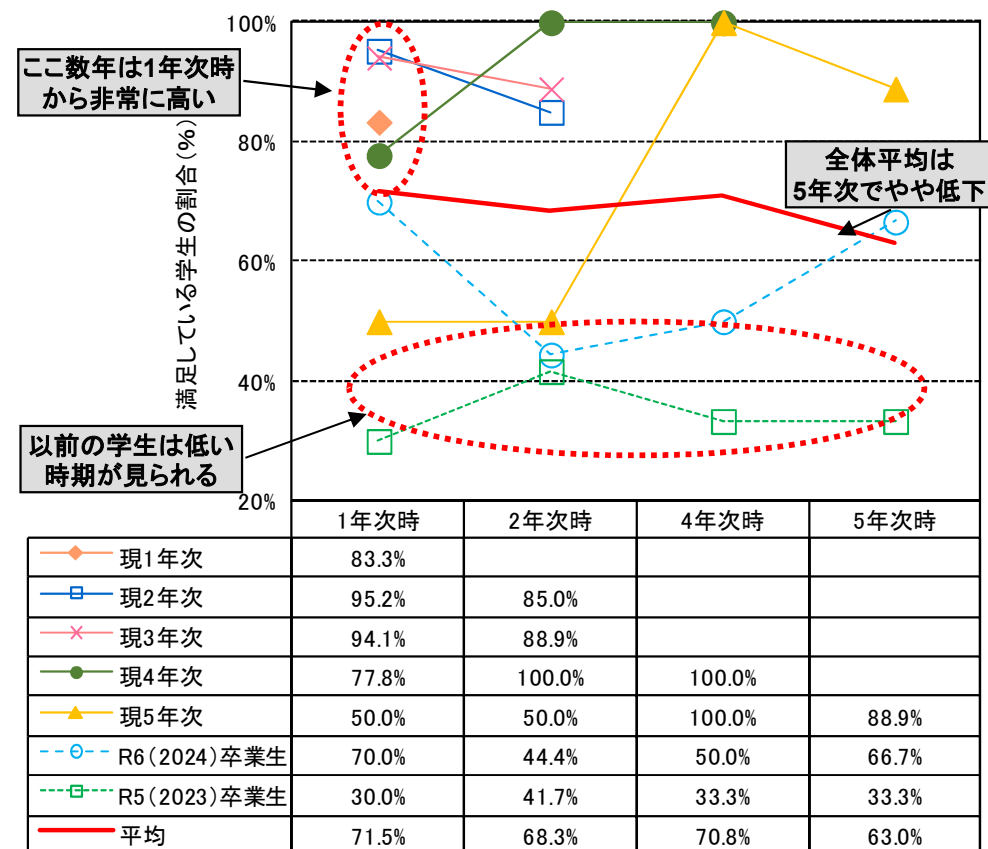
## 2)ICTの総合的な満足度 学年別比較、同一学生群の変化

- 総合的な満足度の学年別比較を見ると、「1年次」が83.3%、「2年次」が85.0%、「4年次」が100.0%、「5年次」が88.9%であり、いずれも高い満足度であった。また、「そう思う」だけを見ると「5年次」が55.6%で最も多く、次いで「2年次」が55.0%となっており、学年との相関関係は見られなかった。
- 同一学生群の満足度を見ると、まだデータ数は少ないものの「平均」としては、1年次から4年次までは横這いで、5年次でやや低下していた。学生群ごとに見ると、以前の学生群の満足度は入学直後の「1年次時」から低かったり、途中で低下して卒業に向けて高くなるなどの傾向が見られたが、ここ数年の学生群の満足度は「1年次時」から非常に高く、多少の変化はあるものの満足度が高い状態を維持しているようであった。

■ICTの総合的な満足度 学年別比較



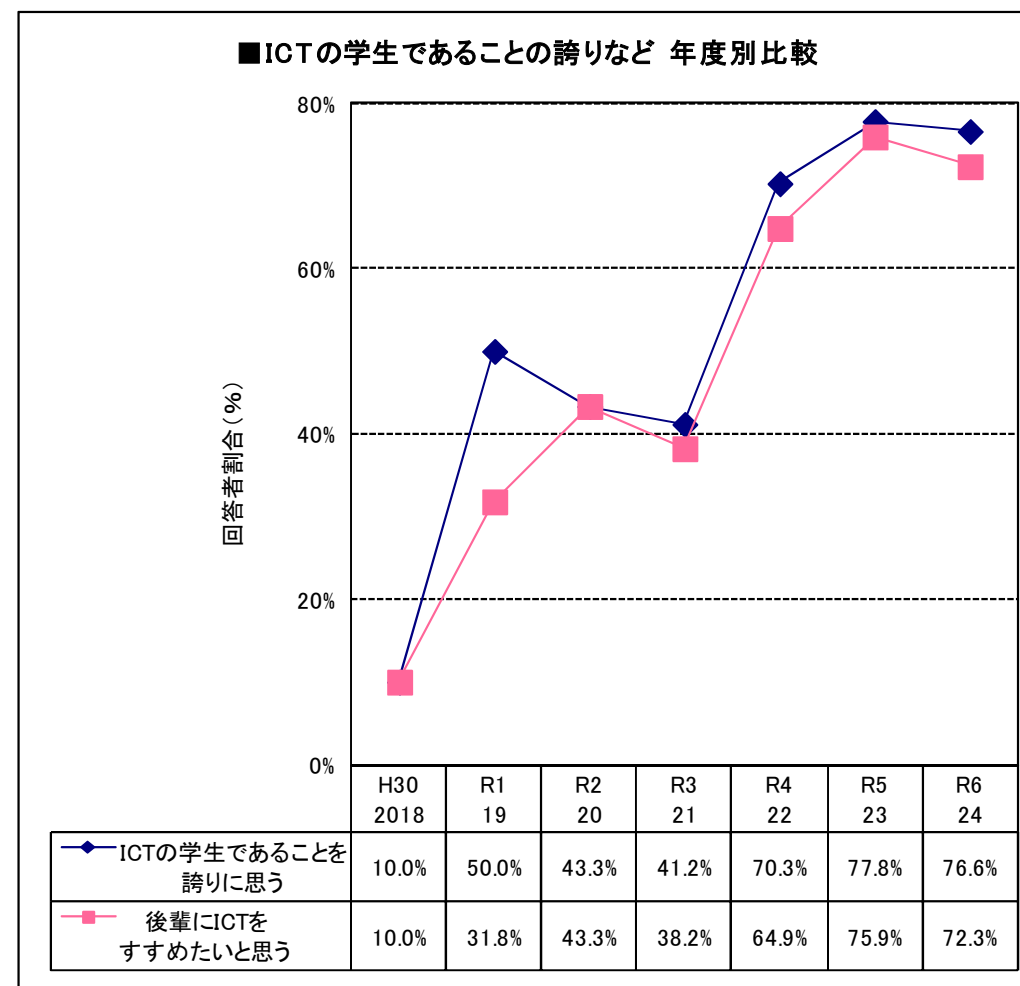
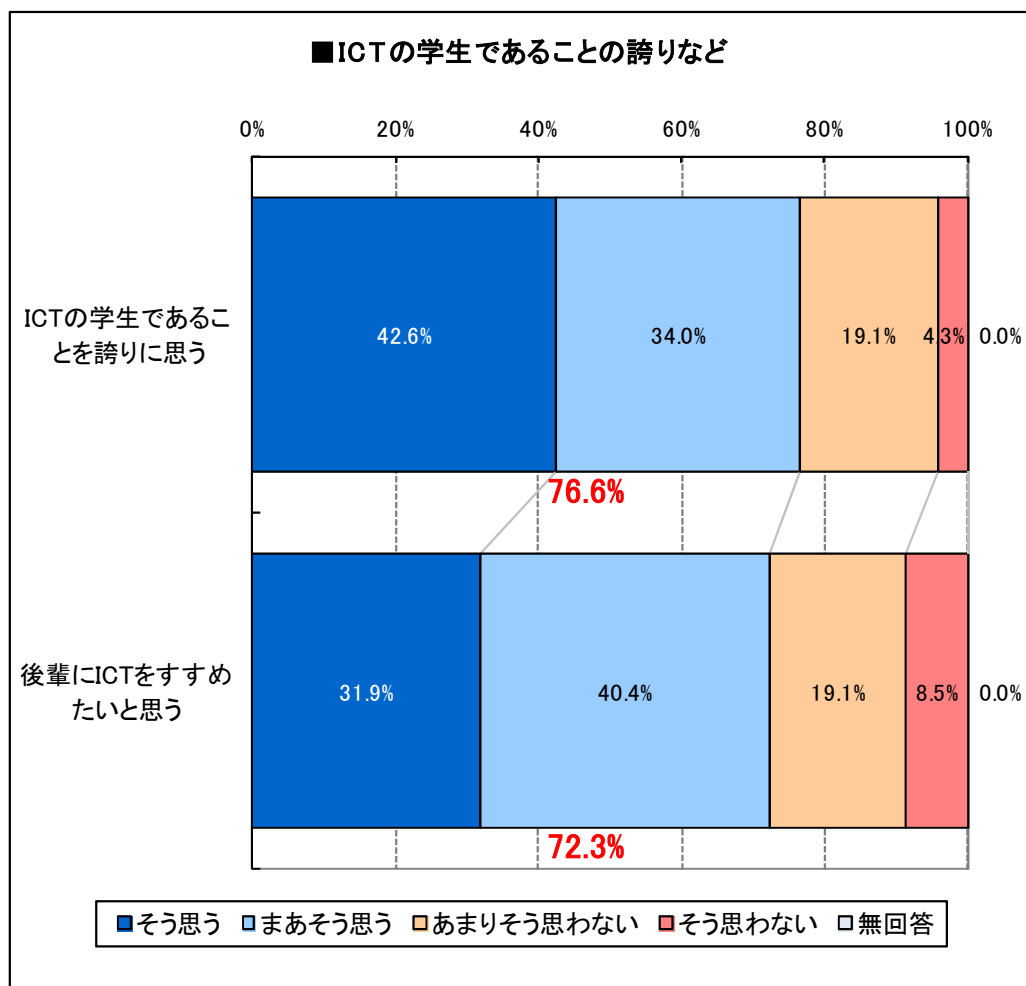
■ICTの総合的な満足度 同一学生群の変化





### 3)ICTの学生であることの誇りなど

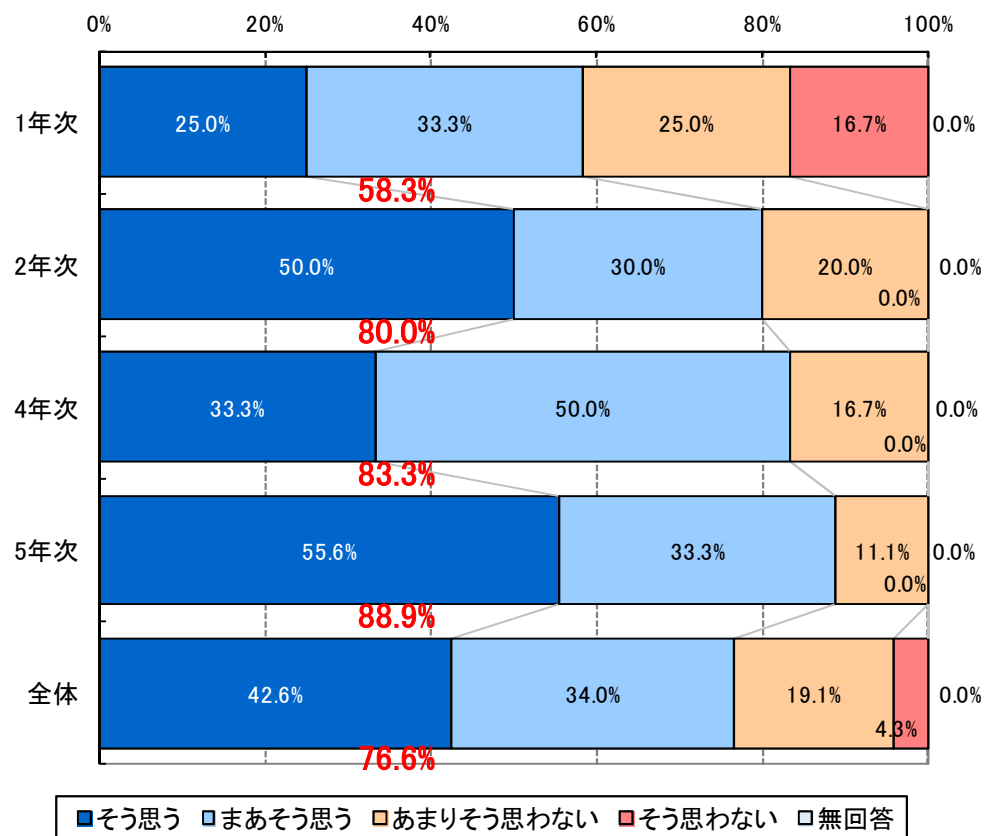
- 帰属意識や愛校心といった感情として、「ICTの学生であることを誇りに思いますか?」「後輩にICTをすすめたいと思いますか?」という質問をしている。
- 「ICTの学生であることを誇りに思いますか?」に対しては、「そう思う」が42.6%、「まあそう思う」が34.0%であり、合計すると76.6%が肯定的な意見であった。「後輩にICTをすすめたいと思うか?」では、「そう思う」が31.9%、「まあそう思う」が40.4%で、肯定的な意見は72.3%であった。
- 年度別に比較すると、過去最高の前回からは低下したものの、高い状態が続いていた。



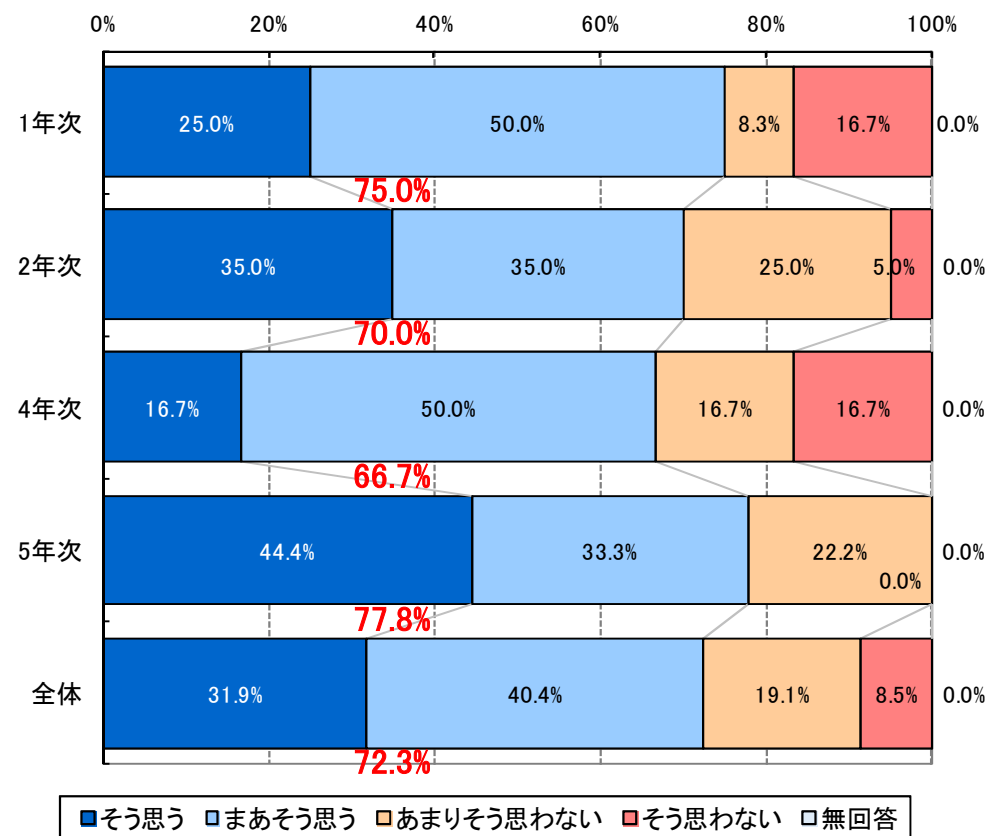
#### 4)ICTの学生であることの誇りなど 学年別比較

- 「ICTの学生であることを誇りに思う」の学年別比較で肯定的な意見の合計を見ると、「1年次」が58.3%、「2年次」が80.0%、「4年次」が83.3%、「5年次」が88.9%であり、高学年ほど誇りに思うという意見が多かった。「1年次」は肯定的な意見が少なく、「そう思わない」が16.7%を占めるなど、やや気になる結果となっていた。
- 「後輩にICTをすすめたいと思う」の肯定的な意見の合計は「1年次」が75.0%、「2年次」が70.0%、「4年次」が66.7%、「5年次」が77.8%となっており、「誇り」とは異なって学年による傾向は見られず、差も小さかった。そして、「そう思わない」は「1年次」と「4年次」が16.7%で多さが目立っていた。

■ICTの学生であることの誇り 学年別比較

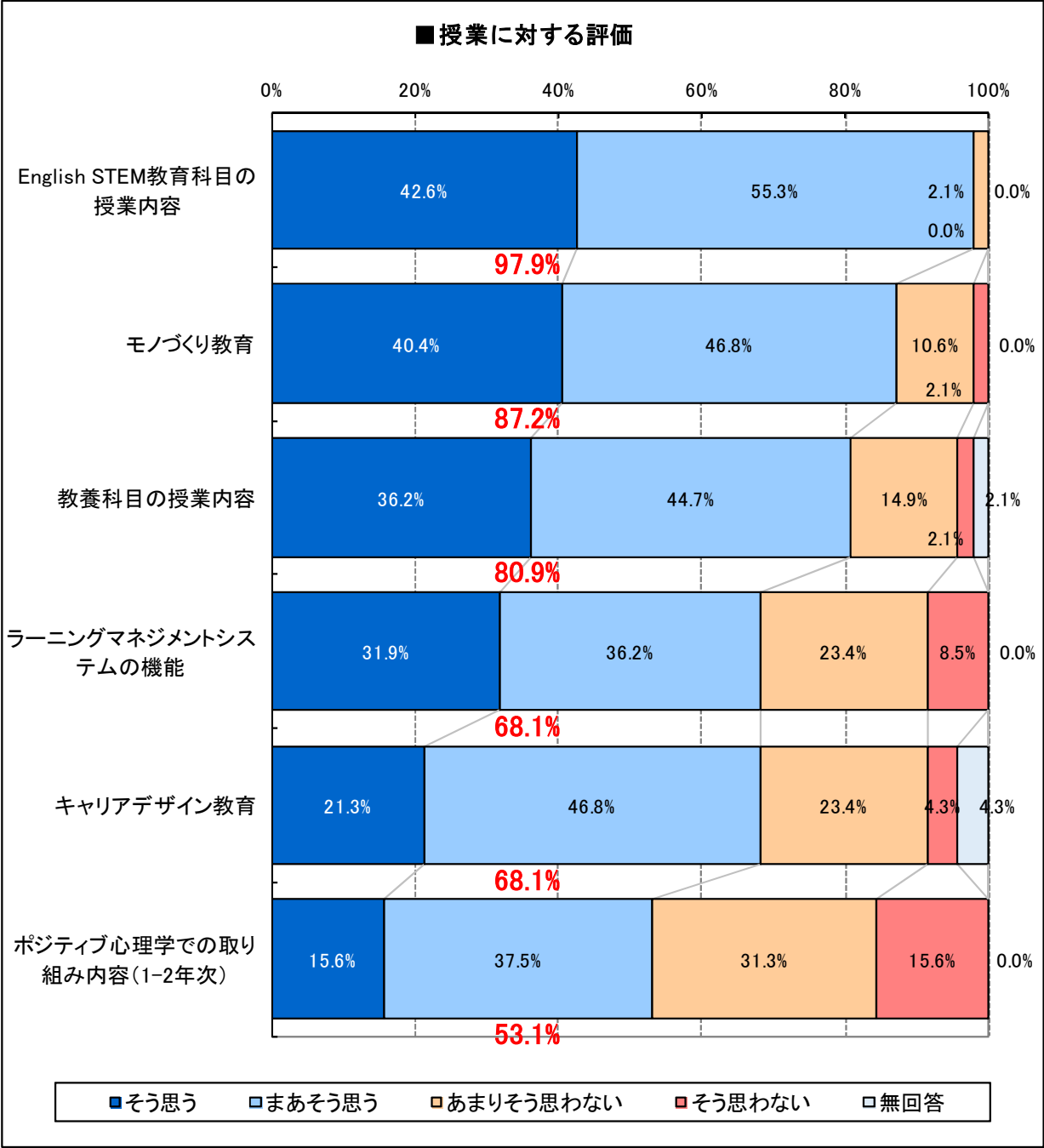


■後輩にICTをすすめたい 学年別比較



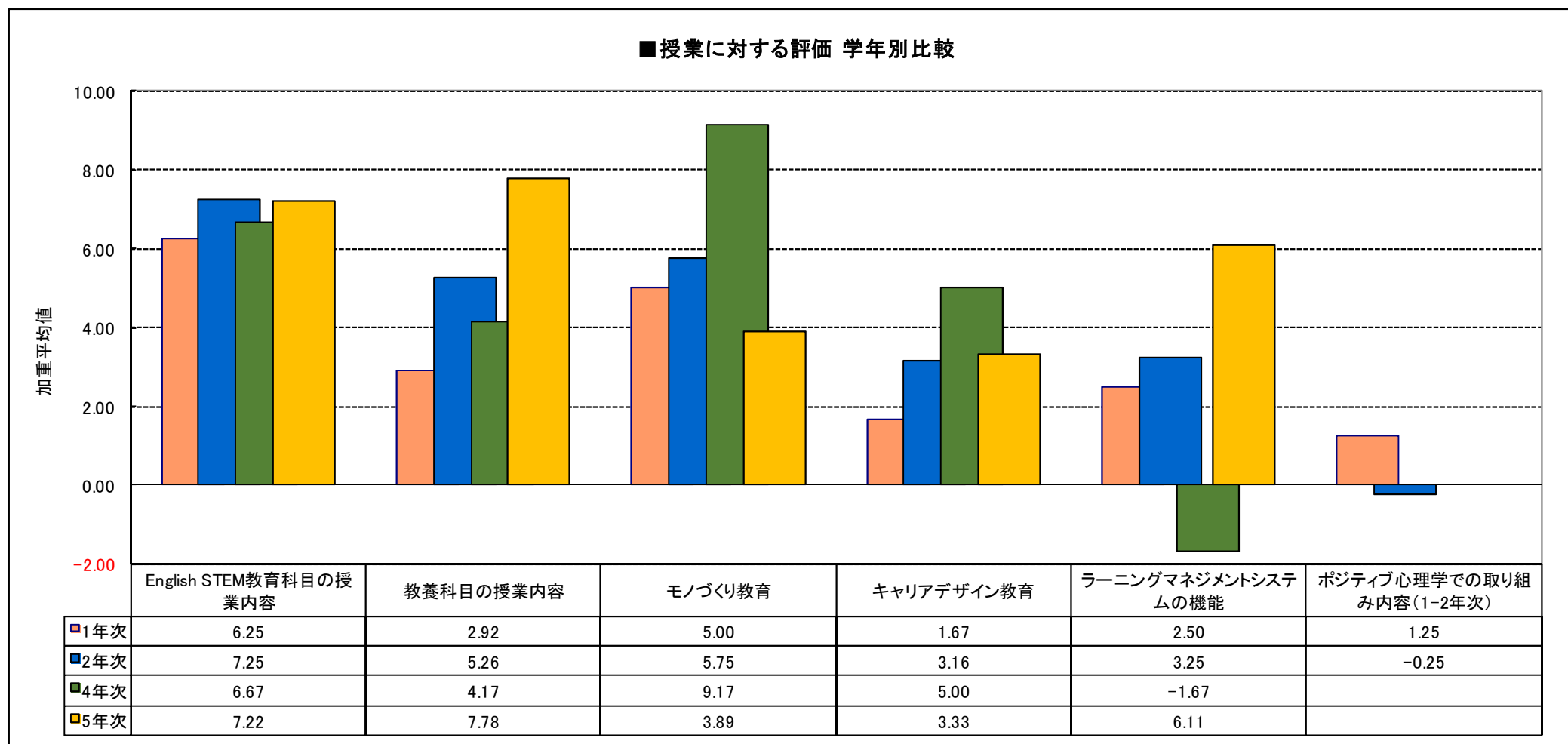
1)授業に対する評価

- 授業に対する評価で肯定的な意見が最も多かったのは、「English STEM教育科目の授業内容」の97.9%であり、「モノづくり教育」が87.2%、「教養科目の授業内容」が80.9%が続いていた。
- 一方、肯定的な意見が最も少なかったのは1～2年次のみに聞いた「ポジティブ心理学での取り組み内容」の53.1%であり、否定的な意見が15.6%と多さが目立っていた。



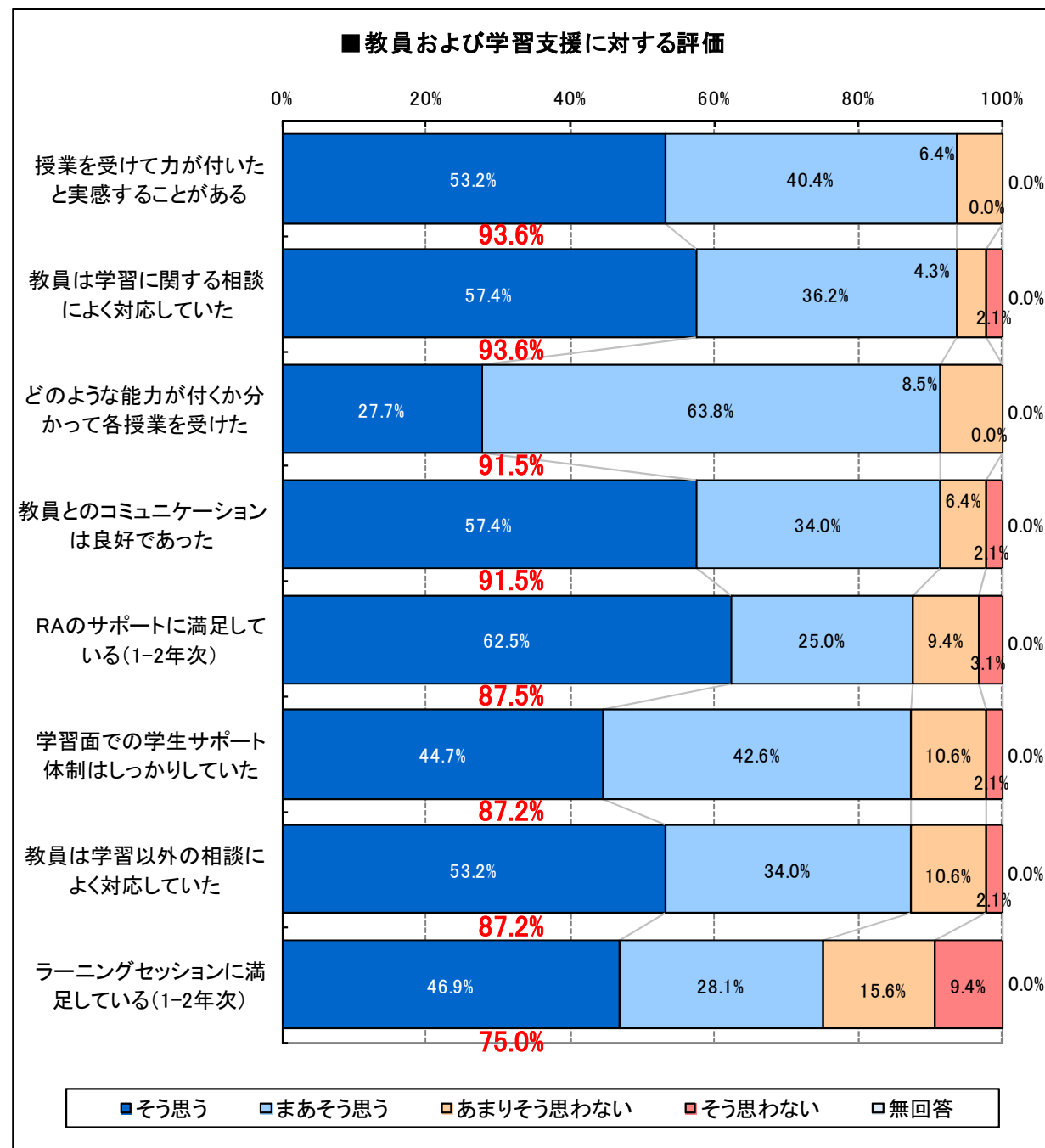
### 3)授業に対する評価 学年別比較

- 授業に対する評価を学年別に比較すると、「4年次」と「5年次」が6項目中の2項目で最も高かった。一方、「1年次」は3項目で最も低かった。
- 学年ごとに見ると、「4年次」は「モノづくり教育」の高さが目立っていたが、「ラーニングマネジメントシステムの機能」はマイナススコアとなっていた。そして、「5年次」は「教養科目の授業内容」と「ラーニングマネジメントシステムの機能」が高く、特に低いものは見られなかった。
- 「1年次」は3項目で最も低く、目立って高いものは見られなかった。そして、「2年次」は「English STEM教育科目の授業内容」はわずかな差で最も高い評価であったが、「ポジティブ心理学での取り組み内容」はマイナススコアであった。



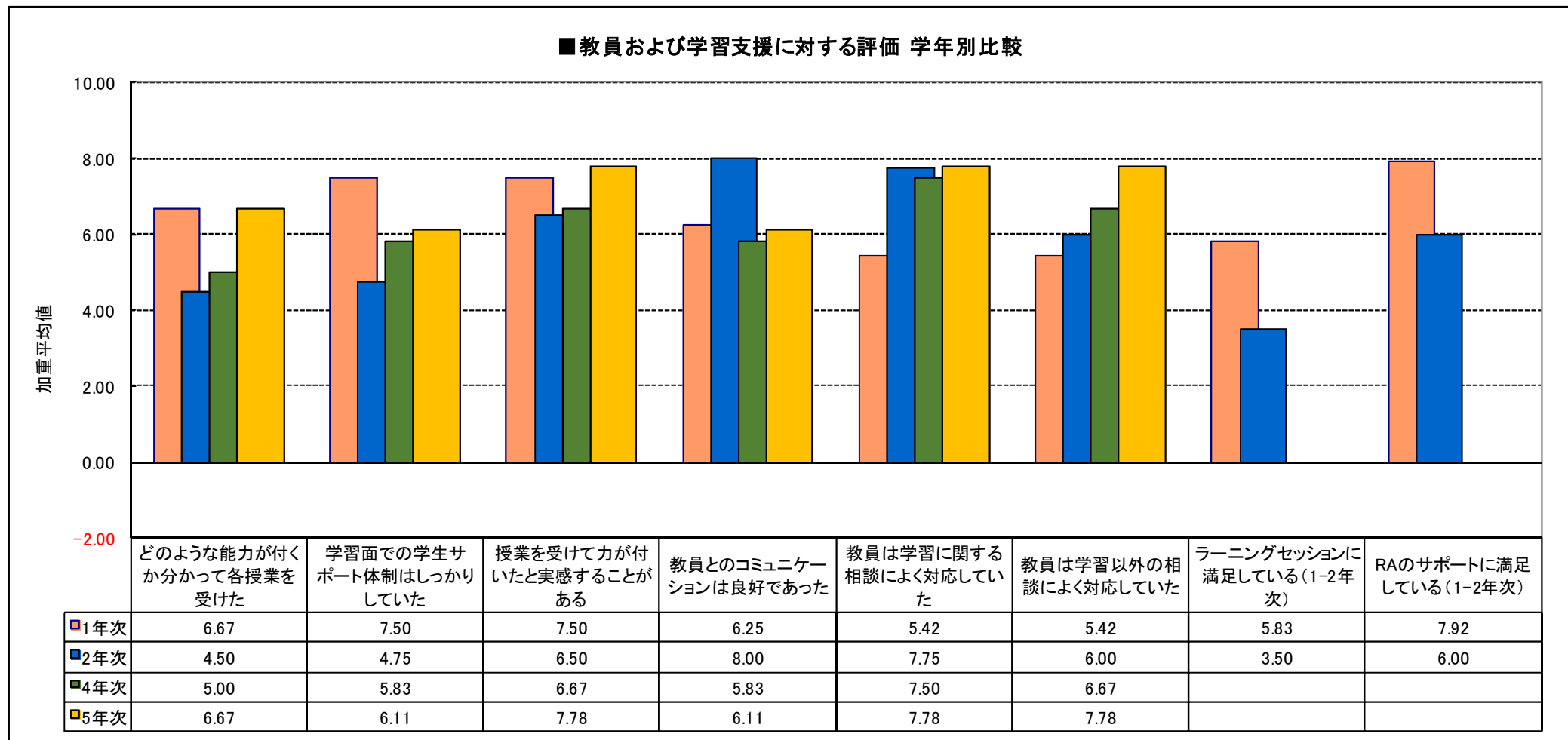
#### 4) 教員および学習支援に対する評価

- 教員および学習支援で肯定的な意見が最も多かったのは「授業を受けて力が付いたと実感することがある」と「教員は学習に関する相談によく対応していた」の93.6%であった。
- 上記に次いで「どのような能力が付くか分かって各授業を受けた」と「教員とのコミュニケーションは良好であった」が91.5%で続いていたが、「どのような能力が付くか分かって各授業を受けた」は「そう思う」が27.7%と全体の中でも最も少なく、強く肯定する意見は少ないという特徴が見られた。
- 一方、肯定的な意見が最も少なかったのは1～2年次のみに聞いた「ラーニングセッションに満足している」の75.0%であった。



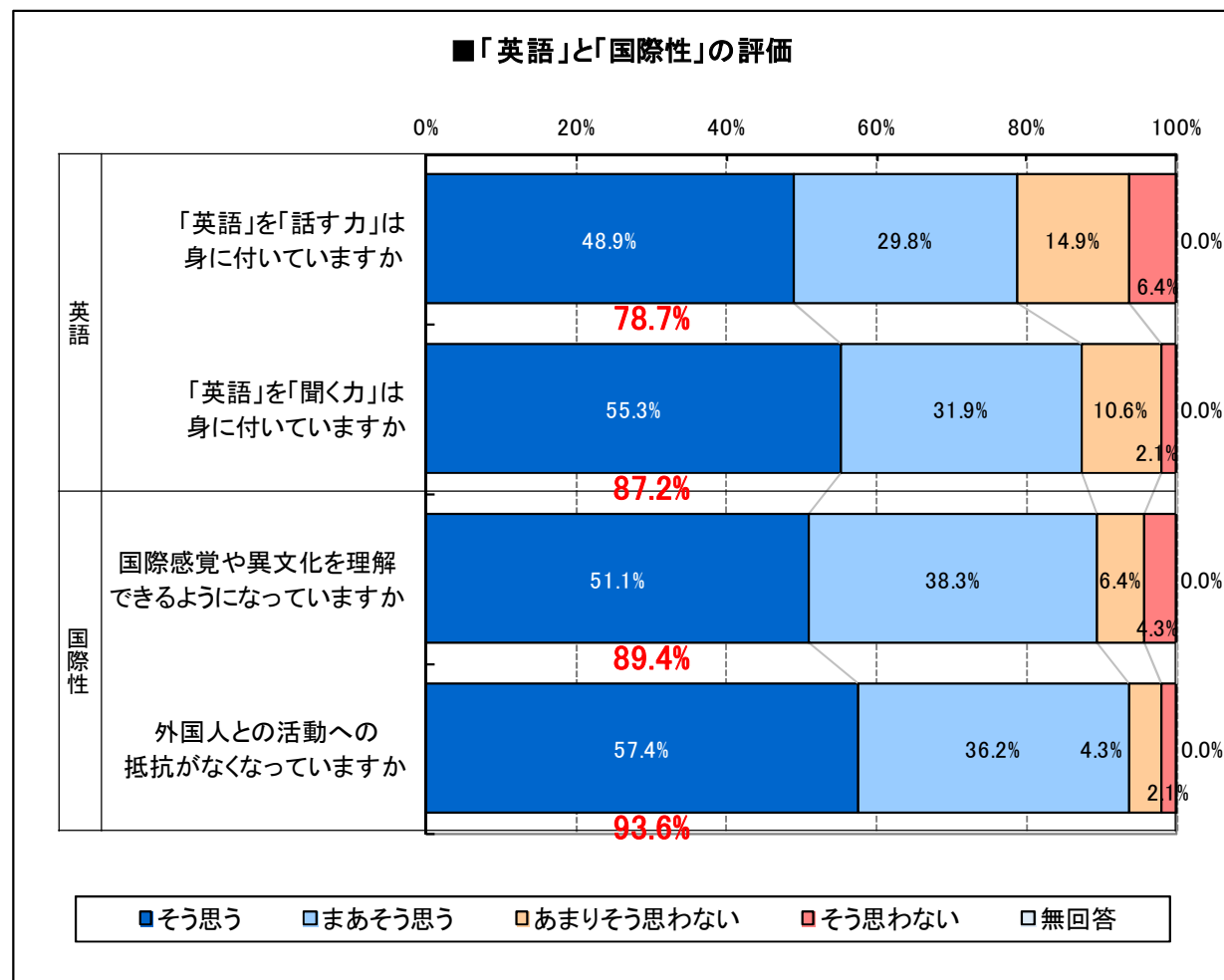
## 6) 教員および学習支援に対する評価 学年別比較

- 教員および学習支援の評価の学年別比較を見ると、高さが目立っていたのは「5年次」であり、同スコアのものも含めて4項目で最も高かった。特に「教員は学習以外の相談によく対応していた」が高く、教員との良好な関係性がうかがえた。
- 上記に次いで、「1年次」は同スコアのものも含めて4項目で評価が最も高く、特に「学習面での学生サポート体制はしっかりしていた」「ラーニングセッションに満足している」「RAのサポートに満足している」の高さが目立っていた。
- 一方、全体的に低かったのは「2年次」であり、5項目で最も低かった。ただし、目立った低さではなく、「教員とのコミュニケーションは良好であった」は目立って高いという特徴も見られた。そして、「4年次」は目立って高い項目はなく、1項目で最も低くなっていたが、いずれも目立つものではなかった。



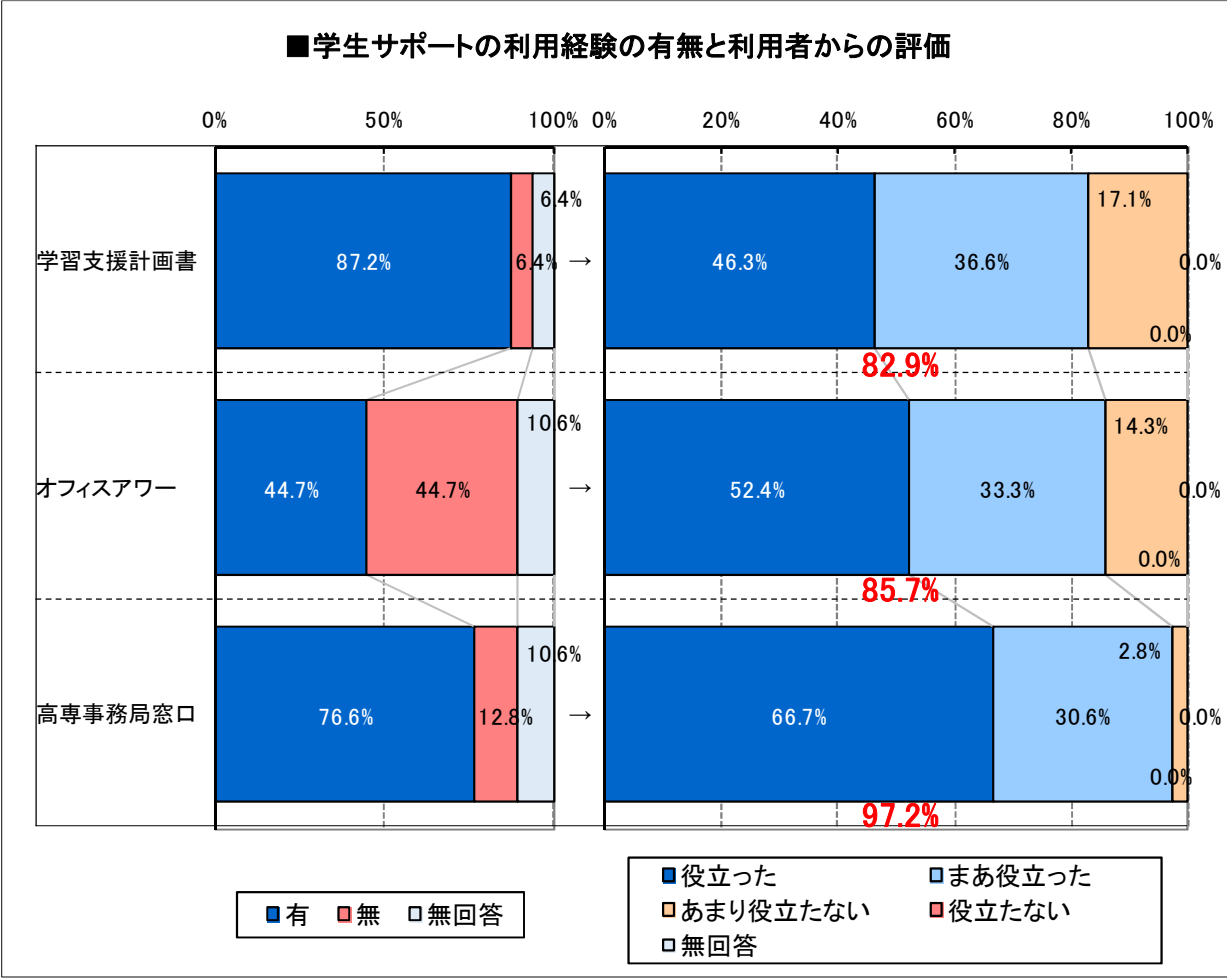
## 7)「英語」と「国際性」の評価

- ICTのカリキュラムの特徴である「英語」と「国際性」に関して4つの質問をした。
- 「英語」に関して、「話す力は身に付いている」の肯定的な意見は78.7%、「聞く力」は87.2%であり、「そう思う」を見ても「聞く力」に自信を持っているようであった。
- 「国際性」に関して、「国際感覚や異文化を理解できるようになっていますか」の肯定的な意見は89.4%、「外国人との活動への抵抗がなくなっていますか」は93.6%であり、どちらも非常に高い評価であった。そして、「そう思う」を見ると「外国人との活動」で強い自信が感じられた。



1) 学生サポートの利用経験の有無と利用者からの評価

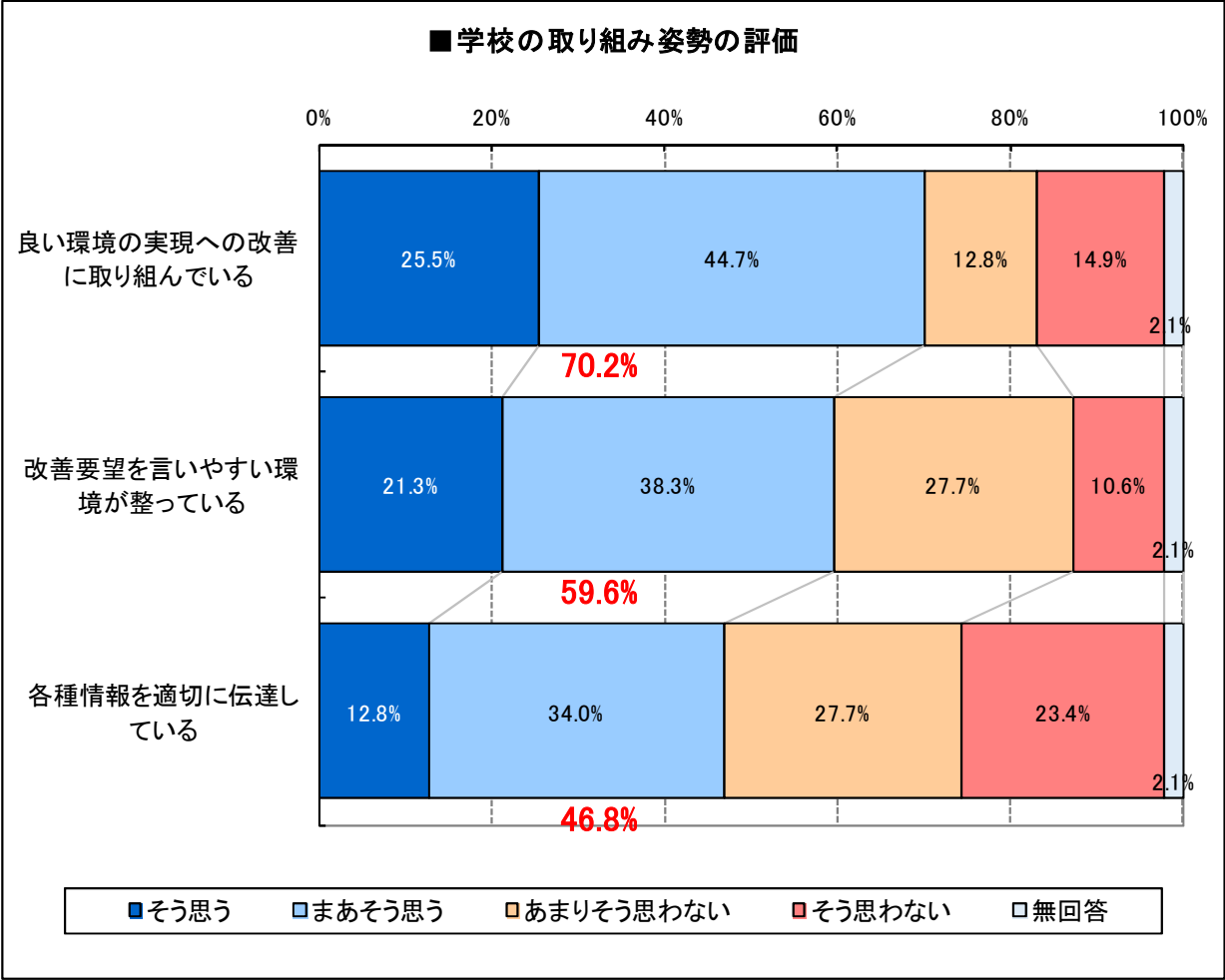
- 学生サポートの機能に関しては、まず利用の有無を聞き、各サポートの利用者だけに満足度を聞いている。
- 利用率が最も高かったのは「学習支援計画書」の87.2%であり、「高専事務局窓口」が76.6%、「オフィスアワー」が44.7%となっていた。
- 各サポートの利用者からの評価を「役立った」と「まあ役立った」の合計で見ると、「高専事務局窓口」が97.2%で最も高く、「オフィスアワー」が85.7%、「学習支援計画書」が82.9%が続いていた。





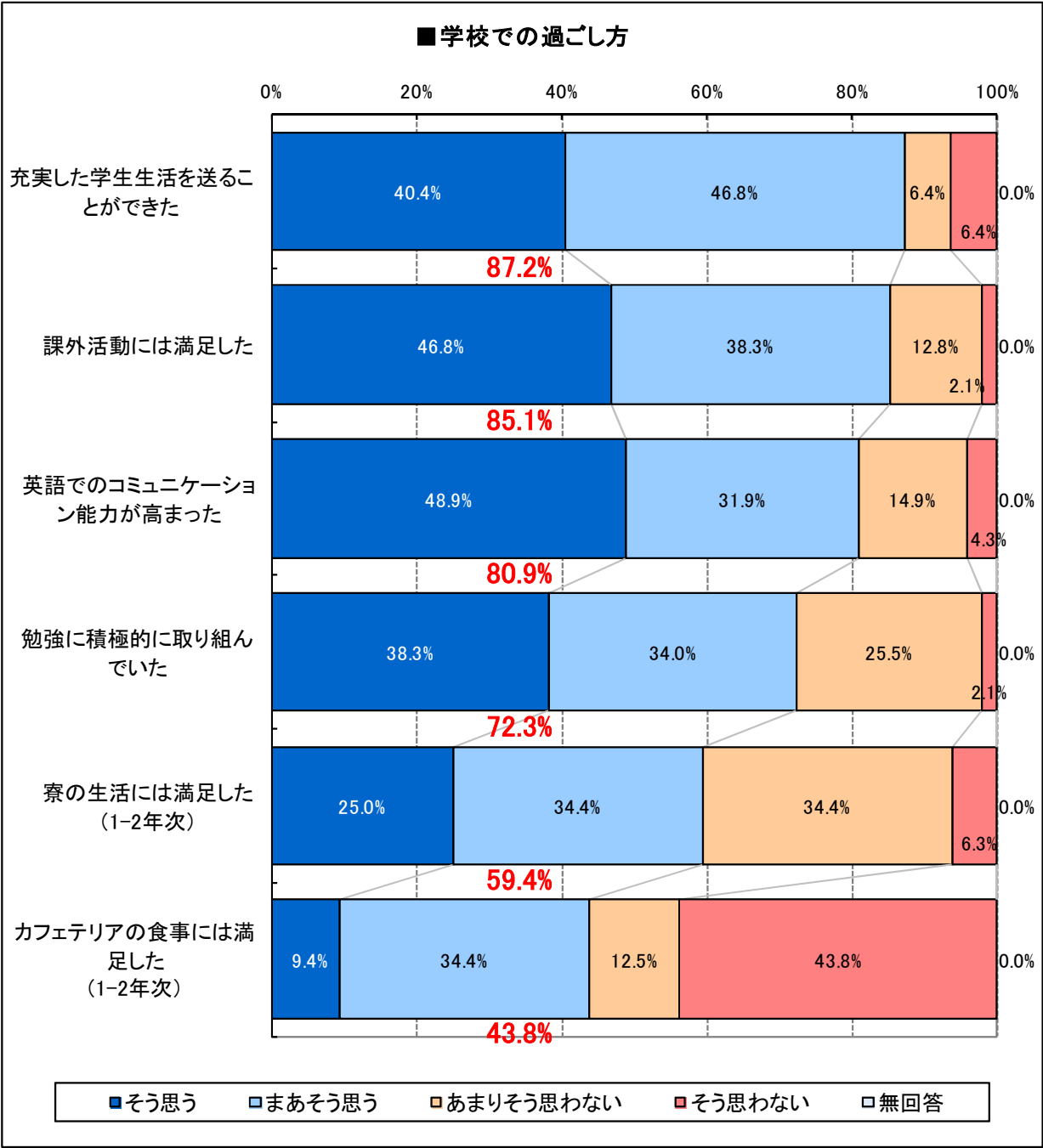
3) 学校の取り組み姿勢の評価

- 学校の取り組み姿勢の評価で最も高かったのは「良い環境の実現への改善に取り組んでいる」の70.2%であり、次いで「改善要望を言いやすい環境が整っている」が59.6%であった。
- 一方、最も低かったのは「各種情報を適切に伝達している」の46.8%であり、否定的な意見の合計が51.1%と半数を超えており、「そう思わない」だけでも23.4%と多く、情報伝達に対する強い不満が見られた。



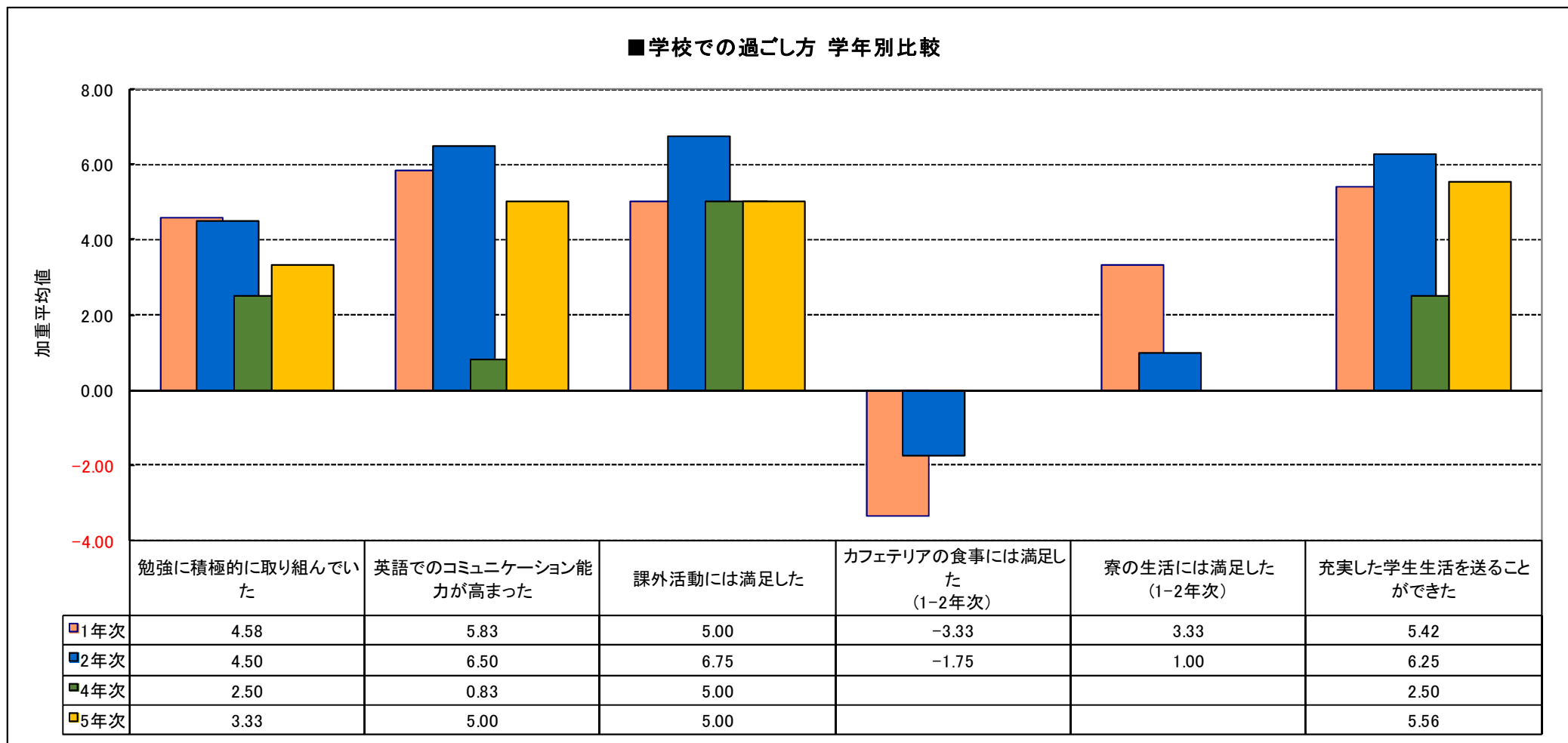
1)学校での過ごし方

- 学校での過ごし方で肯定的な意見が最も多かったのは「充実した学生生活を送ることができた」の87.2%であり、「課外活動には満足した」が85.1%、「英語でのコミュニケーション能力が高まった」が80.9%で続いており、学生生活、課外活動など、充実している様子が見えてきた。
- 一方、肯定的な意見が最も少なかったのは「カフェテリアの食事には満足した」の43.8%で、「そう思わない」が43.8%と非常に多かった。次いで少なかったのは「寮の生活には満足した」の59.4%であり、1～2年次に聞いた2項目の評価が非常に低かった。



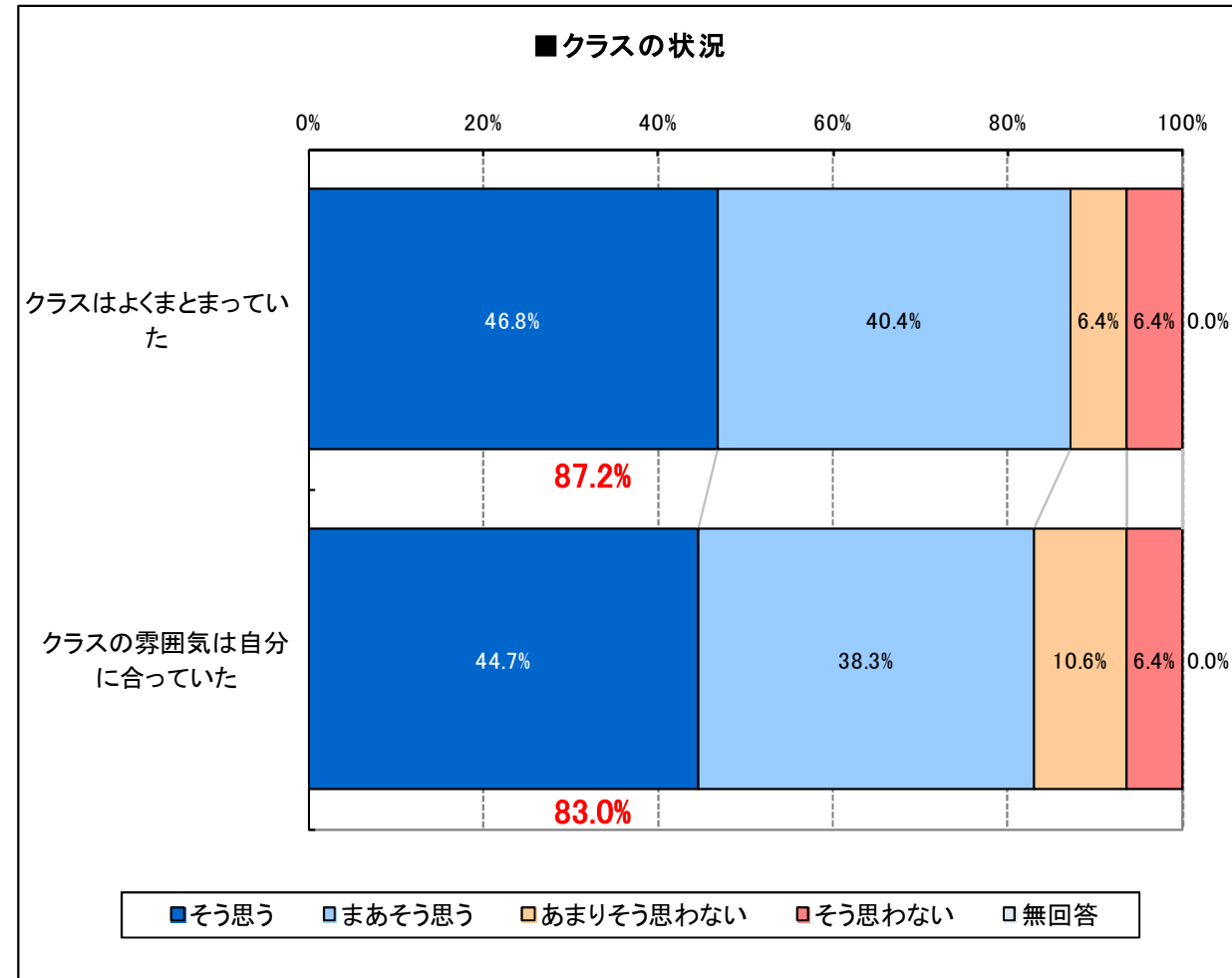
### 3) 学校での過ごし方 学年別比較

- 学校での過ごし方を学年別に比較すると、1～2年次に聞いた「カフェテリアの食事には満足した」は「1年次」の評価が低く、両学年ともにマイナススコアとなっており、「寮の生活には満足した」は「2年次」の方が低かった。
- 上記以外の項目を見ると、「2年次」は「英語でのコミュニケーション能力が高まった」「課外活動には満足した」「充実した学生生活を送ることができた」の3項目が高く、充実している様子がうかがえた。そして、「1年次」はわずかな差ではあるが「勉強に積極的に取り組んでいた」が高かった。
- 一方、「4年次」は「勉強に積極的に取り組んでいた」「英語でのコミュニケーション能力が高まった」「充実した学生生活を送ることができた」が低く、特に「英語でのコミュニケーション」「充実した学生生活」の低さが目立っていた。



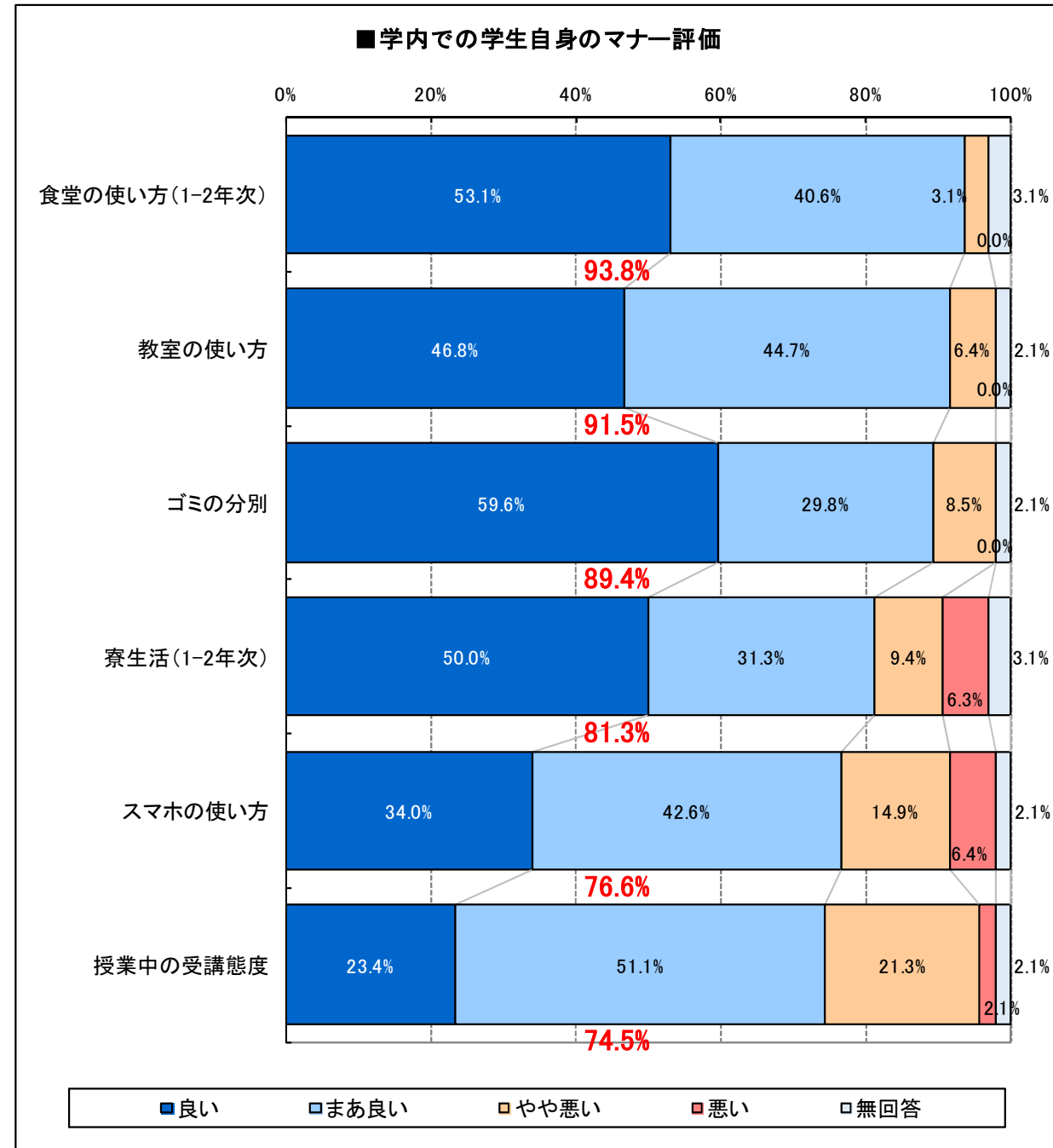
#### 4) クラスの状況

- 「クラスはよくまとまっていた」の肯定的な意見は87.2%、「クラスの雰囲気は自分に合っていた」は83.0%であった。
- 2項目ともに「そう思う」が45%前後を占めており、クラスの状況は良いものと思われる。ただし、否定的な意見が1～2割見られた。



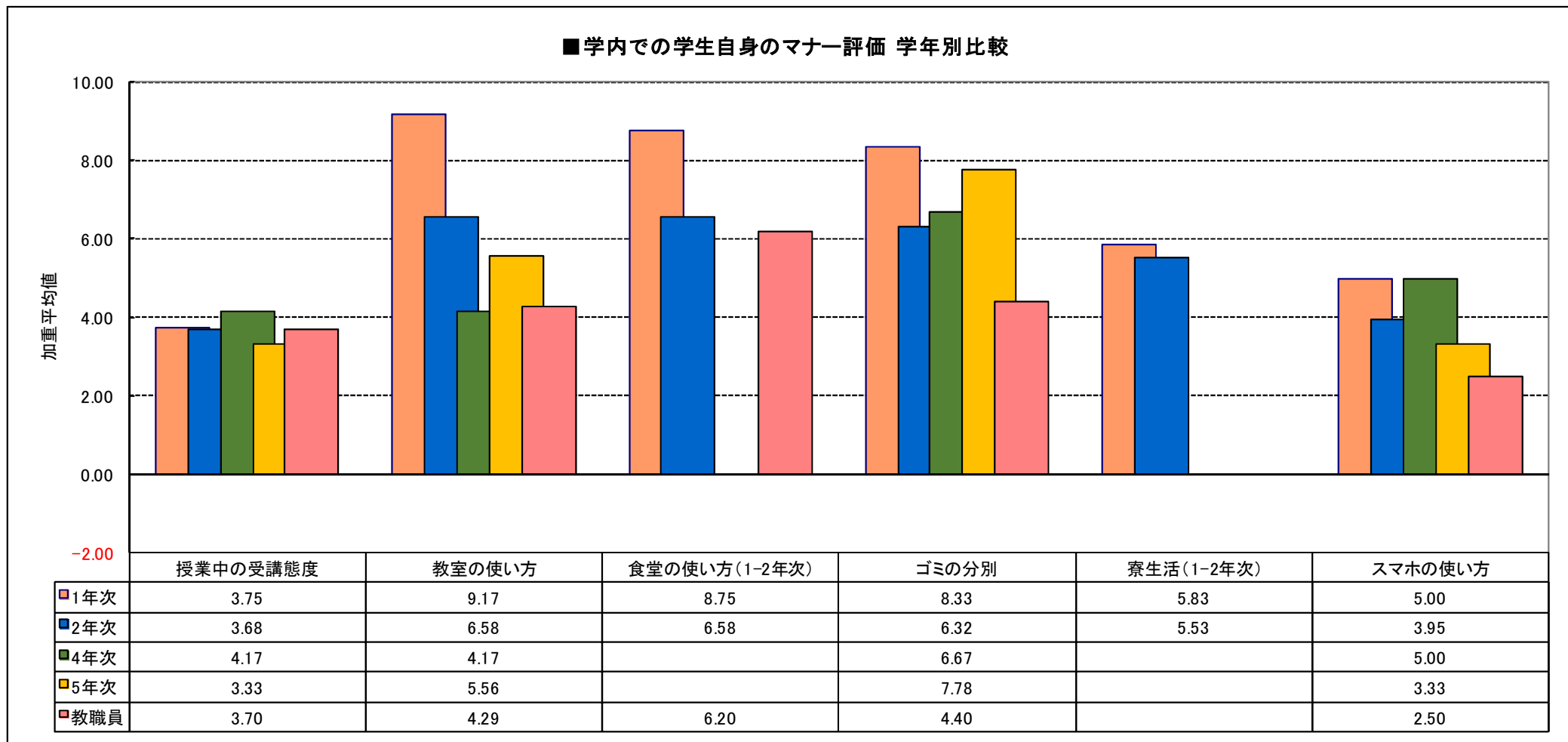
## 6)学内での学生自身のマナー評価

- 学内での学生自身のマナー評価は、「学生自身が自分自身のマナーをどう思うか?」という、自己評価を聞く質問になっている。
- 肯定的な意見が最も多かったのは「食堂の使い方」の93.8%であり、「教室の使い方」が91.5%、「ゴミの分別」が89.4%が続いていた。
- 一方、肯定的な意見が最も少なかったのは「授業中の受講態度」の74.5%であり、次いで「スマホの使い方」が76.6%となっていた。



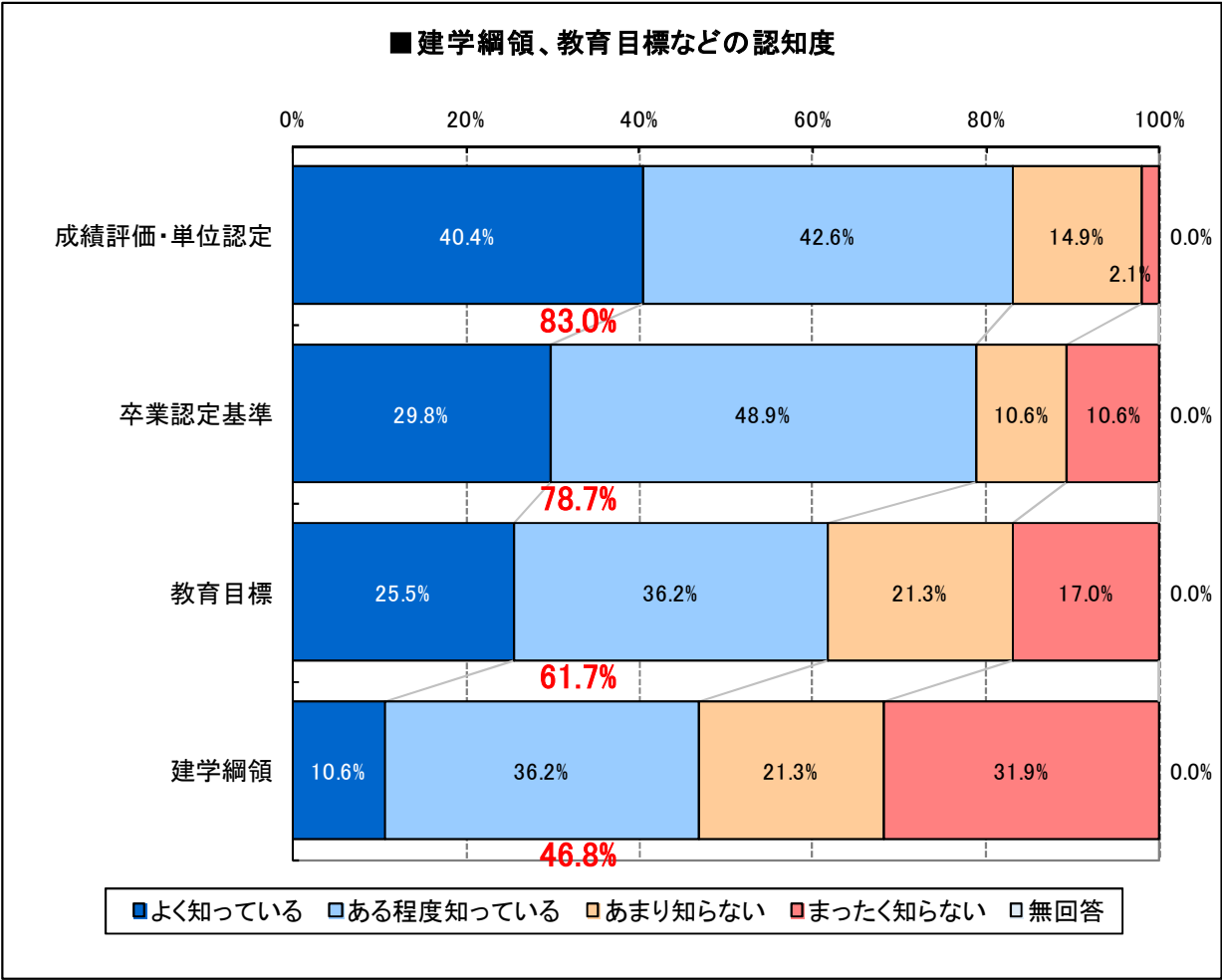
## 8)学内での学生自身のマナー評価 学年別比較

- 学内での学生自身のマナー評価を学年別に比較したところ、同スコアのものも含めて「1年次」が5項目で最も高く、特に「教室の使い方」「食堂の使い方」の高さが目立っていた。
- 上記以外では、「4年次」が「授業中の受講態度」「スマホの使い方」で最も高かった。そして、「授業中の受講態度」は学年間の差が非常に小さく、似た評価となっていた。
- 一方、目立って低い学年は見られなかったものの、「5年次」が2項目で最も低かった。
- 「教職員」にも、各々の項目に関して学生のマナーをどう感じるかと聞いているが、「ゴミの分別」と「スマホの使い方」では学生と比較して厳しい評価となっていた。



1) 建学綱領、教育目標などの認知度

- 建学綱領、教育目標などの認知度で、最も高かったのは「成績評価・単位認定」の83.0%であり、「卒業認定基準」が78.7%で続いていた。
- 一方、最も認知度が低かったのは「建学綱領」の46.8%であり、「まったく知らない」が31.9%であった。

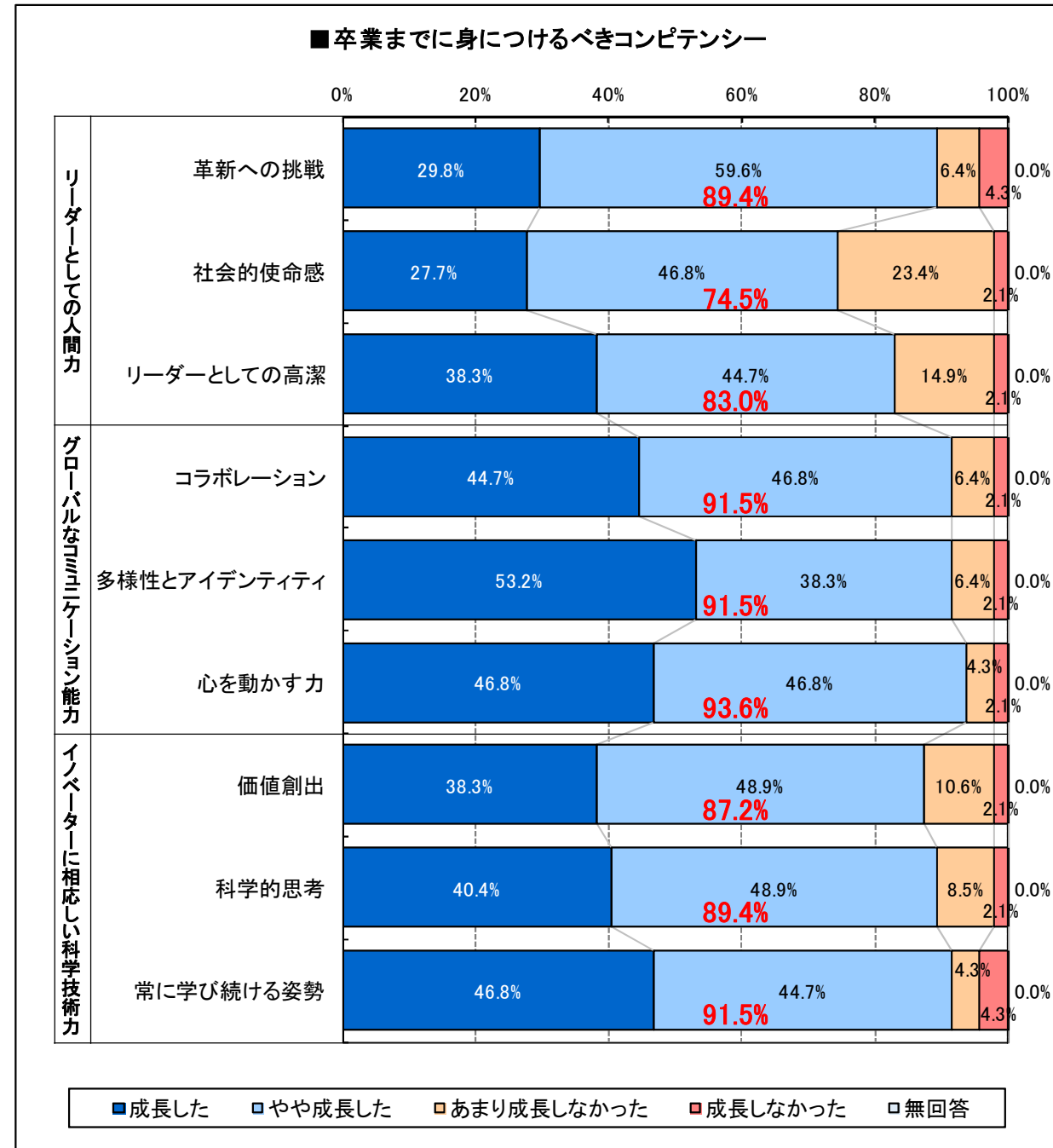


### 3) 卒業までに身につけるべきコンピテンシー

- 卒業までに身につけるべきコンピテンシーは、3分野の9項目に対して成長の度合いを聞いている。
- 「リーダーとしての人間力」の分野で肯定的な意見が最も多かったのは「革新への挑戦」の89.4%であり、「リーダーとしての高潔」が83.0%、「社会的使命感」が74.5%となっていた。
- 「グローバルなコミュニケーション能力」の分野で最も多かったのは「心を動かす力」の93.6%であり、「コラボレーション」と「多様性とアイデンティティ」が、いずれも91.5%となっていた。
- 「イノベーターに相応しい科学技術力」の分野で最も多かったのは「常に学び続ける姿勢」の91.5%であり、「科学的思考」が89.4%、「価値創出」が87.2%となっていた。

#### ■ 卒業までに身につけるべきコンピテンシーの一覧

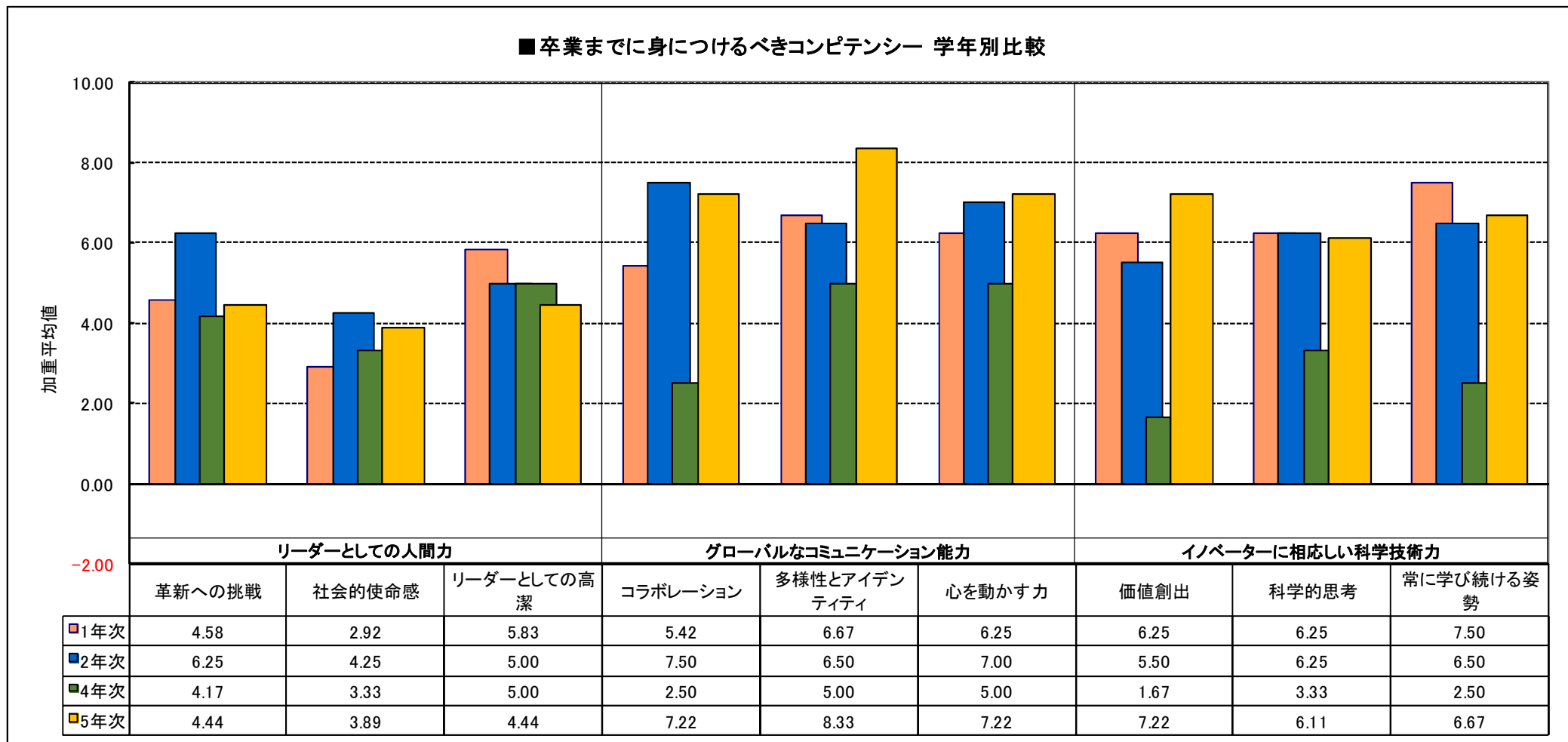
- I 社会に貢献するリーダーとしての人間力
- ・革新への挑戦
  - ・社会的使命感
  - ・リーダーとしての高潔
- II グローバルに活躍できるコミュニケーション能力
- ・コラボレーション
  - ・多様性とアイデンティティ
  - ・心を動かす力
- III イノベーターに相応しい卓越した科学技術力
- ・価値創出
  - ・科学的思考
  - ・常に学び続ける姿勢





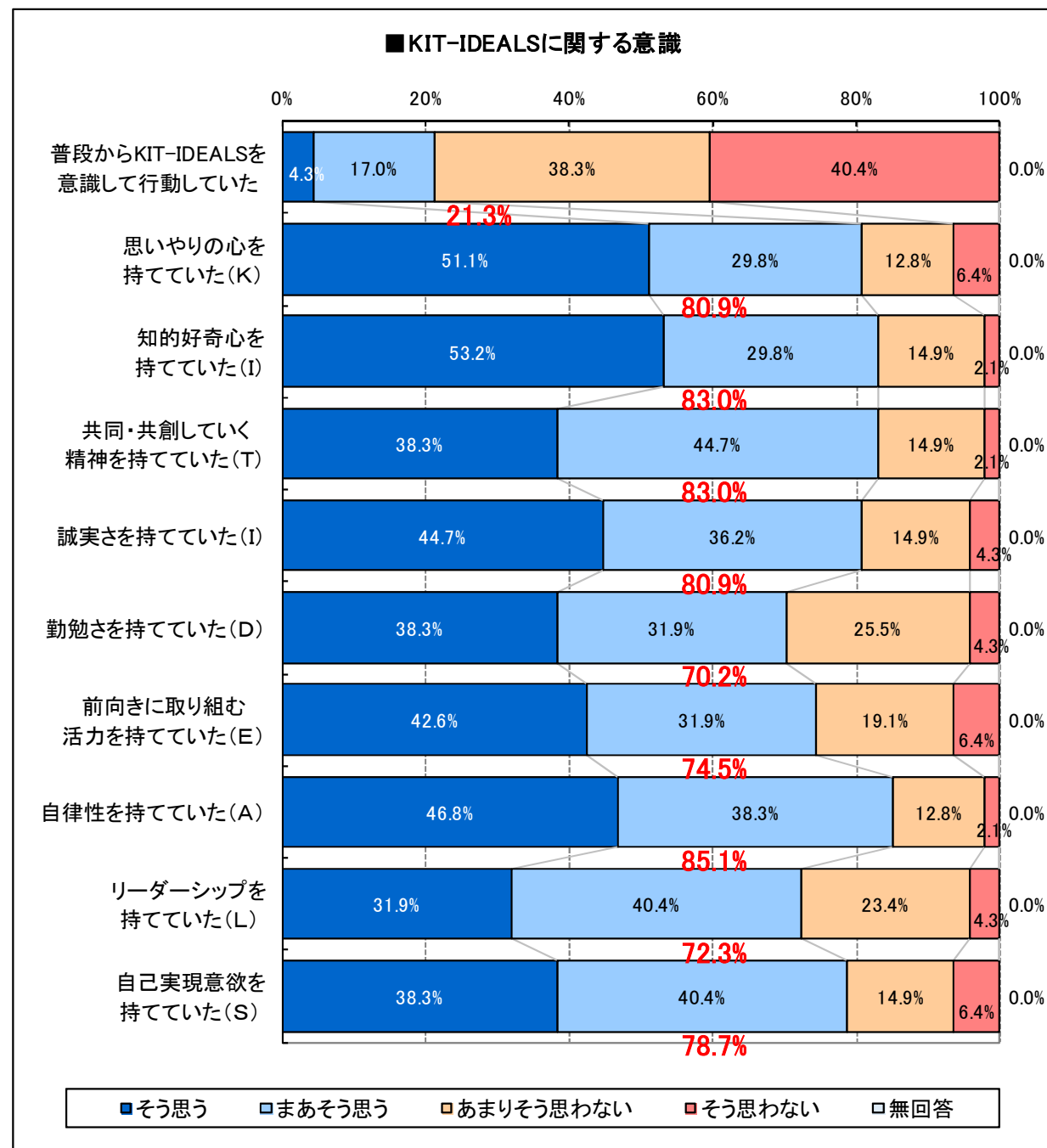
## 5) 卒業までに身につけるべきコンピテンシー 学年別比較

- 卒業までに身につけるべきコンピテンシーの成長度合いを学年別に比較すると、9項目中の7項目で「4年次」が最も低く、特に「イノベーターに相応しい科学技術力」の分野での低さが目立っていた。
- 「4年次」以外では全体的に高い学年、低い学年は見られなかったが、同スコアのものも含めて「2年次」が4項目で最も高く、「リーダーとしての人間力」の分野で2項目、特に「革新への挑戦」の高さが目立っていた。
- 「1年次」「5年次」は各々3項目で最も高かった。「1年次」は「リーダーとしての高潔」「常に学び続ける姿勢」、「5年次」は「多様性とアイデンティティ」の高さが目立っていた。



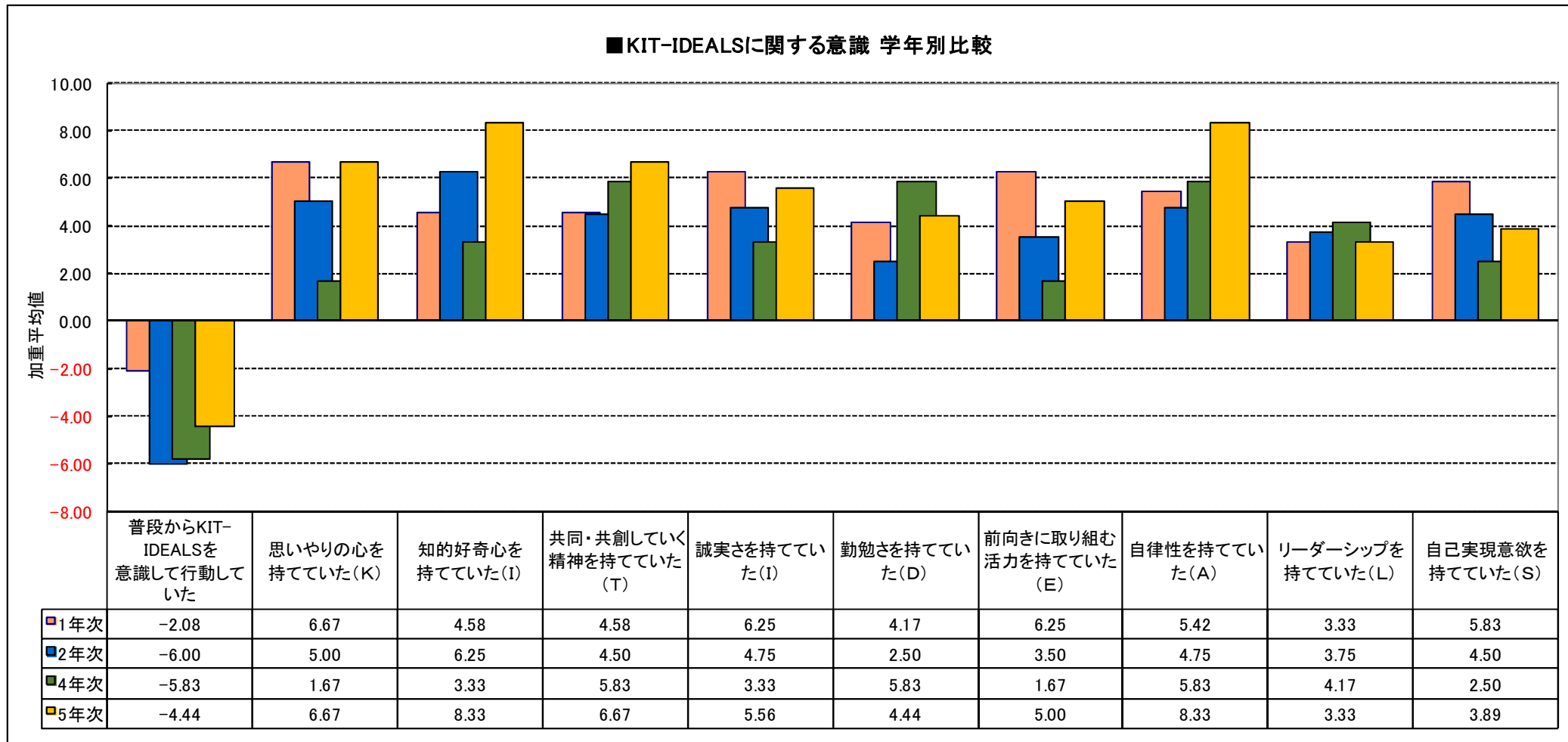
## 6)KIT-IDEALSに関する意識

- 「普段からKIT-IDEALSを意識して行動していた」では、「そう思う」が4.3%、「まあそう思う」が17.0%であり、合わせると肯定的な意見は21.3%であった。一方で「そう思わない」が40.4%であり、否定的な意見の合計は78.7%と多かった。
- KIT-IDEALSの9項目の中で、肯定的な意見の合計が最も多かったのは「自律性を持っていた(A)」の85.1%であり、「知的好奇心を持っていた(I)」と「共同・共創していく精神を持っていた(T)」が83.0%で続いていた。肯定的な意見は9項目すべてで7割を超えており、高い意識が感じられた。一方、肯定的な意見が最も少なかったのは、「勤勉さを持っていた(D)」の70.2%であった。



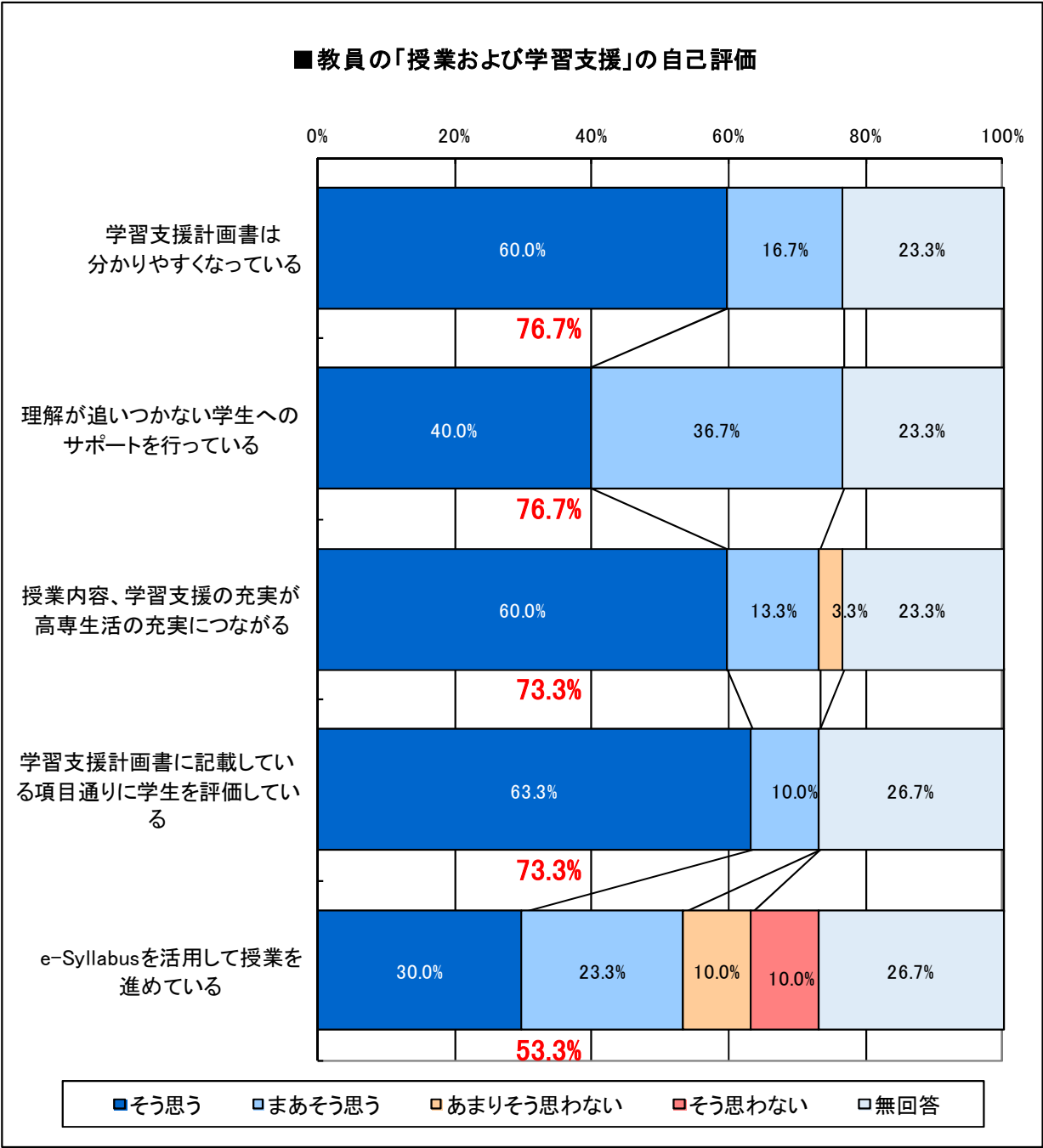
## 8)KIT-IDEALSに関する意識 学年別比較

- 最初に「普段からKIT-IDEALSを意識して行動していた」を見ると、すべての学年がマイナススコアであり、特に「2年次」と「4年次」が低かった。
- KIT-IDEALSの各項目で高めであったのは「1年次」と「5年次」であり、同スコアのものも含めて、各々4項目で最も高かった。個別に見ると「1年次」は「誠実さを持っていた(I)」「前向きに取り組む活力を持っていた(E)」「自己実現意欲を持っていた(S)」が高かった。そして、「5年次」は「知的好奇心を持っていた(I)」と「自律性を持っていた(A)」の高さが目立っていた。
- 一方、全体的に低めであったのは「4年次」で、5項目で最も低く、「思いやりの心を持っていた(K)」と「前向きに取り組む活力を持っていた(E)」の低さが目立っていたが、「勤勉さを持っていた(D)」と「リーダーシップを持っていた(L)」は最も高かった。そして、「2年次」には高いものが見られず、「勤勉さを持っていた(D)」の低さが目立っていた。



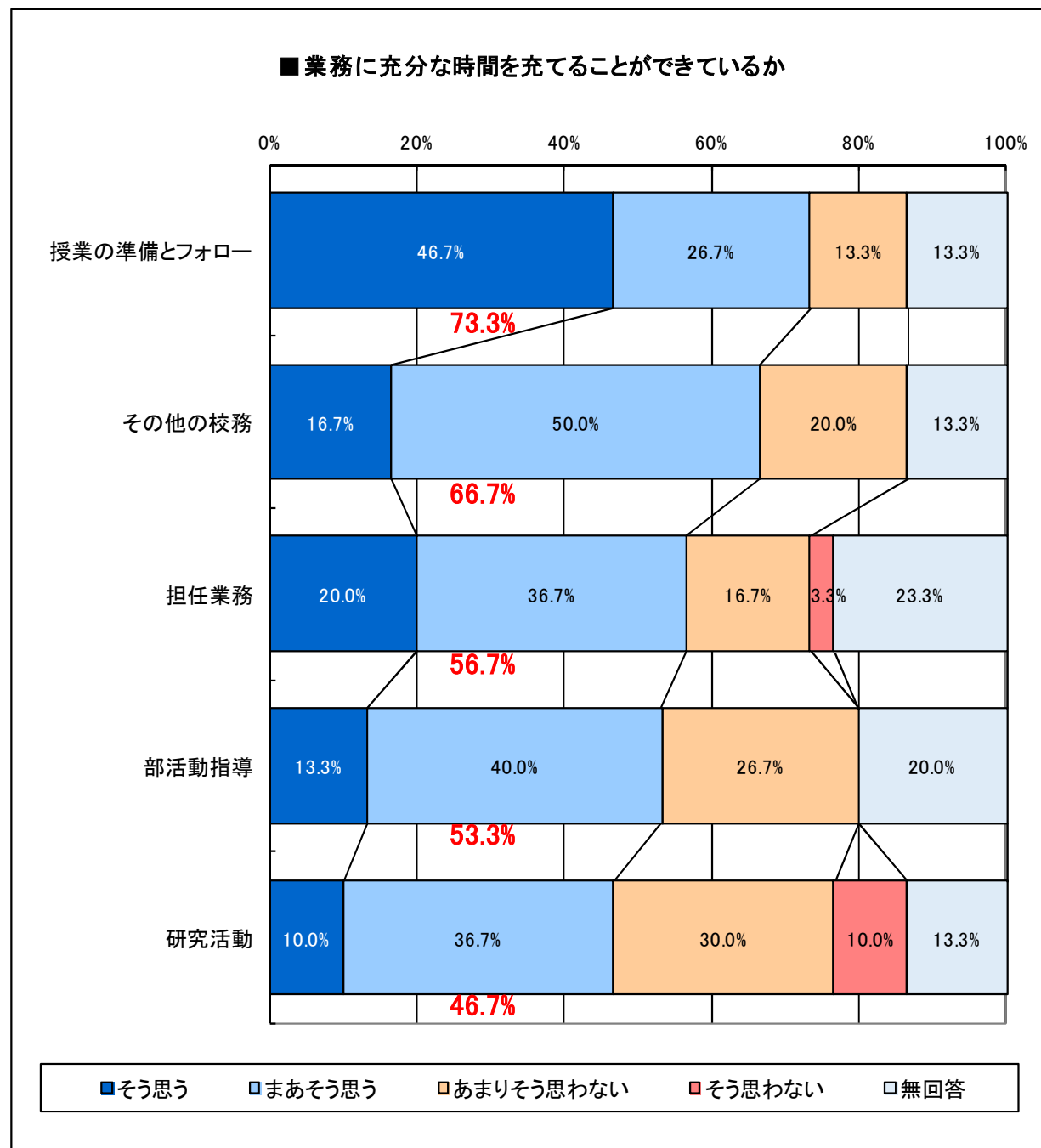
1)教員の「授業および学習支援」の自己評価

- 「授業および学習支援」の自己評価では、全体的に「無回答」が多かったが、これは授業や学習支援に接していない層の回答であると思われる。
- 各項目の肯定的な意見の合計を見ると、「学習支援計画書は分かりやすくなっている」と「理解が追いつかない学生へのサポートを行っている」が76.7%で最も多く、「授業内容、学習支援の充実が高専生活の充実につながる」と「学習支援計画書に記載している項目通りに学生を評価している」が73.3%で続いていた。
- 一方、最も少なかったのは「e-Syllabusを活用して授業を進めている」の53.3%であった。



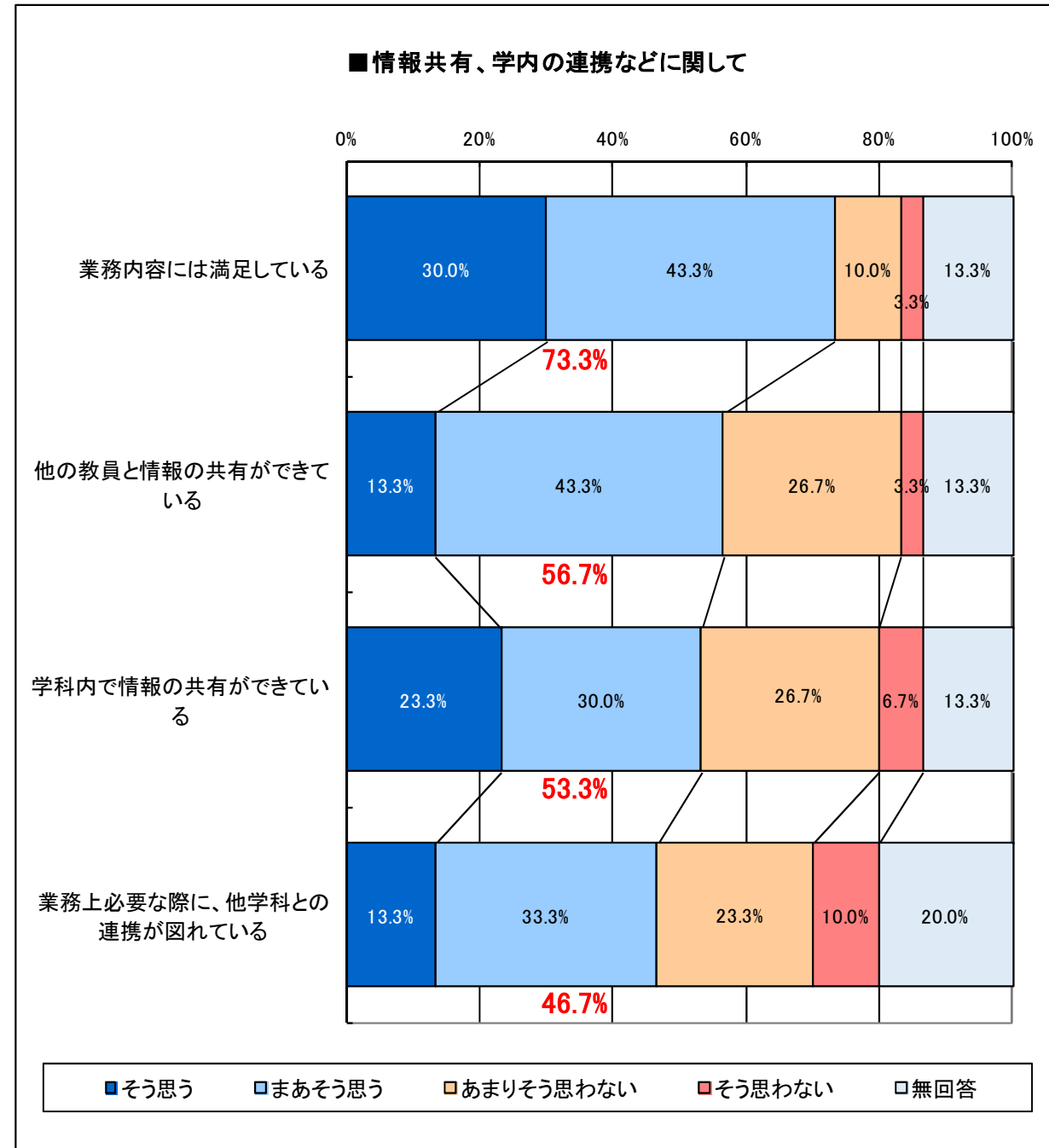
### 3)「教員の業務」に充てる時間に関して

- 「教員が業務に充てる時間」では「無回答」が多く見られた。特に「担任業務」で多い点などを見ると、該当しない設問に「無回答」としているケースが多いものと思われる。
- 肯定的な意見が最も多かったのは「授業の準備とフォロー」の73.3%であり、「そう思う」が46.7%と多く、最も時間を充てているようであった。
- 上記に次いで「その他の校務」が66.7%、「担任業務」が56.7%、「部活動指導」が53.3%、「研究活動」が46.7%と続いており、これが現在の業務の時間配分、もしくは優先順位と言えそうであった。



5)「情報共有、学内の連携など」に関して

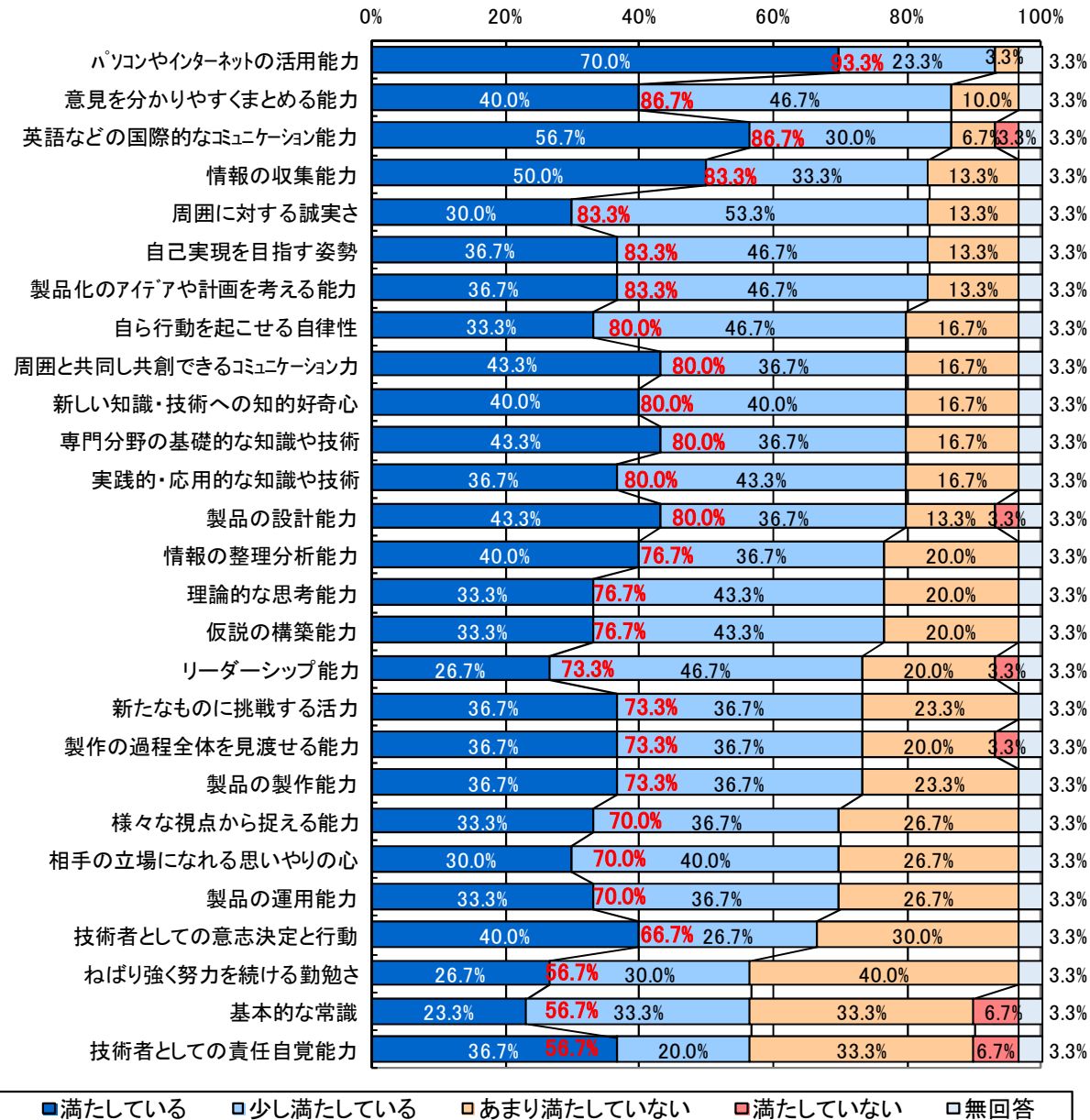
- 「情報共有、学内の連携など」で肯定的な意見が最も多かったのは「業務内容には満足している」の73.3%であり、「そう思う」が30.0%と多かった。
- 上記に次いで、「他の教員と情報の共有ができている」が56.7%、「学科内で情報の共有ができている」が53.3%で続いていた。
- 一方、最も少なかったのは「業務上必要な際に、他学科との連携が図れている」の46.7%であり、「無回答」が20.0%と多かった。



## 7)教職員による卒業生の能力の評価

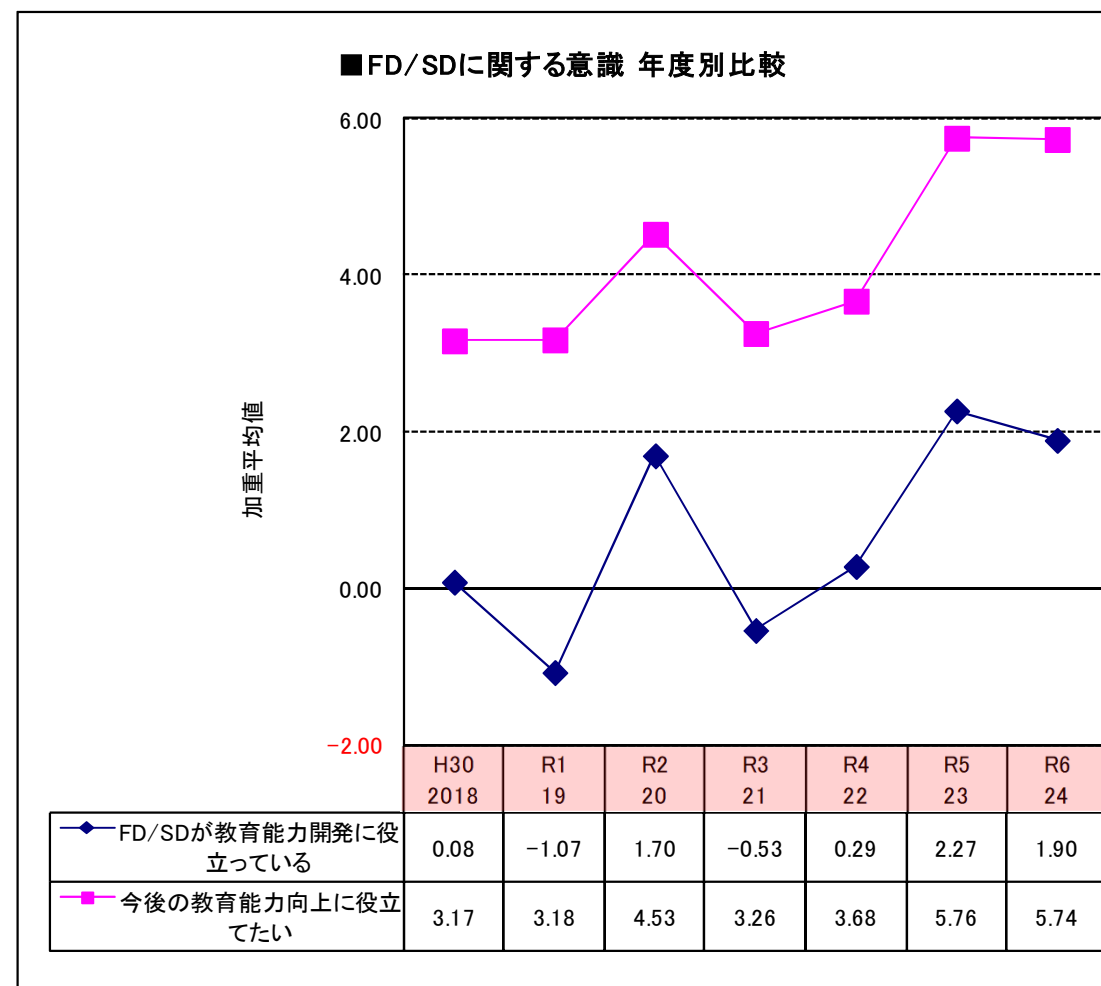
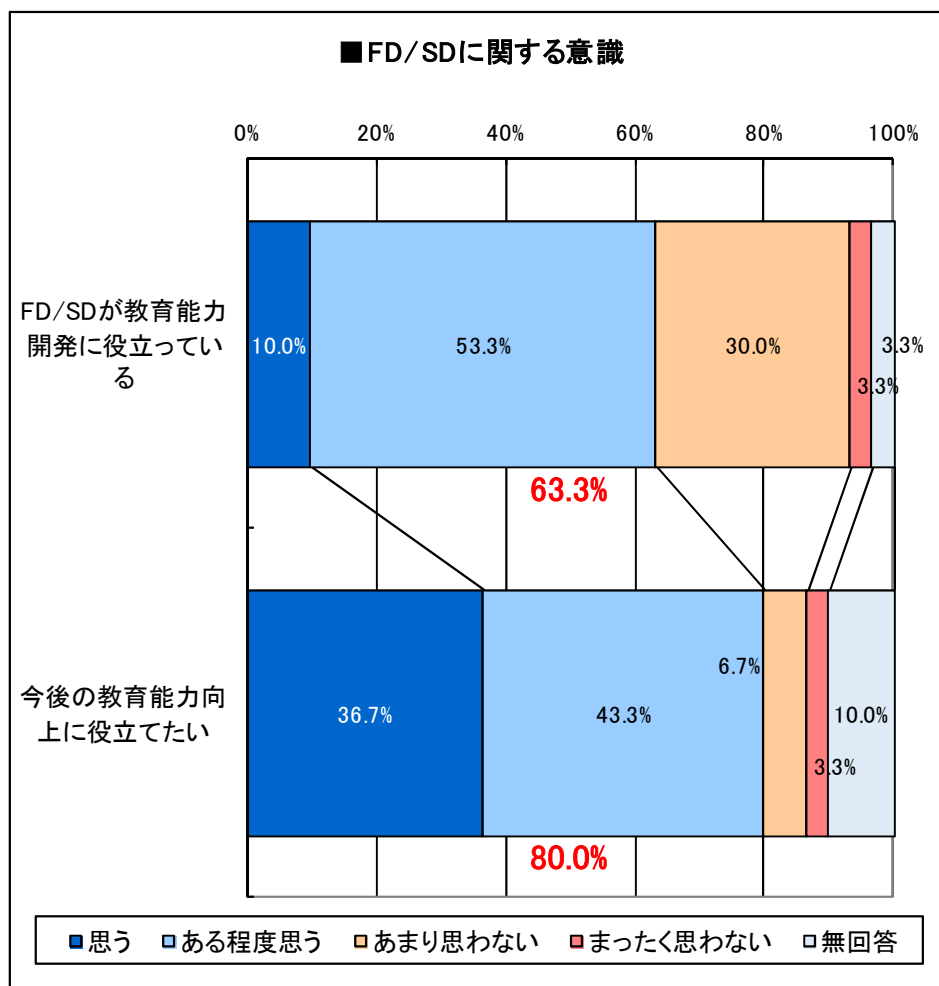
- 教職員の「卒業生の卒業時の能力の評価」で最も評価が高かったのは「パソコンやインターネットの活用能力」の93.3%であり、「そう思う」が70.0%と非常に多かった。
- 上記に次いで、「意見を分かりやすくまとめる能力」と「英語などの国際的なコミュニケーション能力」が86.7%となっており、「英語」に関しても「そう思う」が56.7%と多く、ICT卒業生の強味と見ているようであった。
- 一方、肯定的な意見が最も少なかったのは「ねばり強く努力を続ける勤勉さ」「基本的な常識」「技術者としての責任自覚能力」の56.7%であり、「そう思う」が最も少なかったのは「基本的な常識」の23.3%であった。

■教職員による国際高専卒業生の能力評価(教職員のみ)



## 8)「FD/SD」に関して

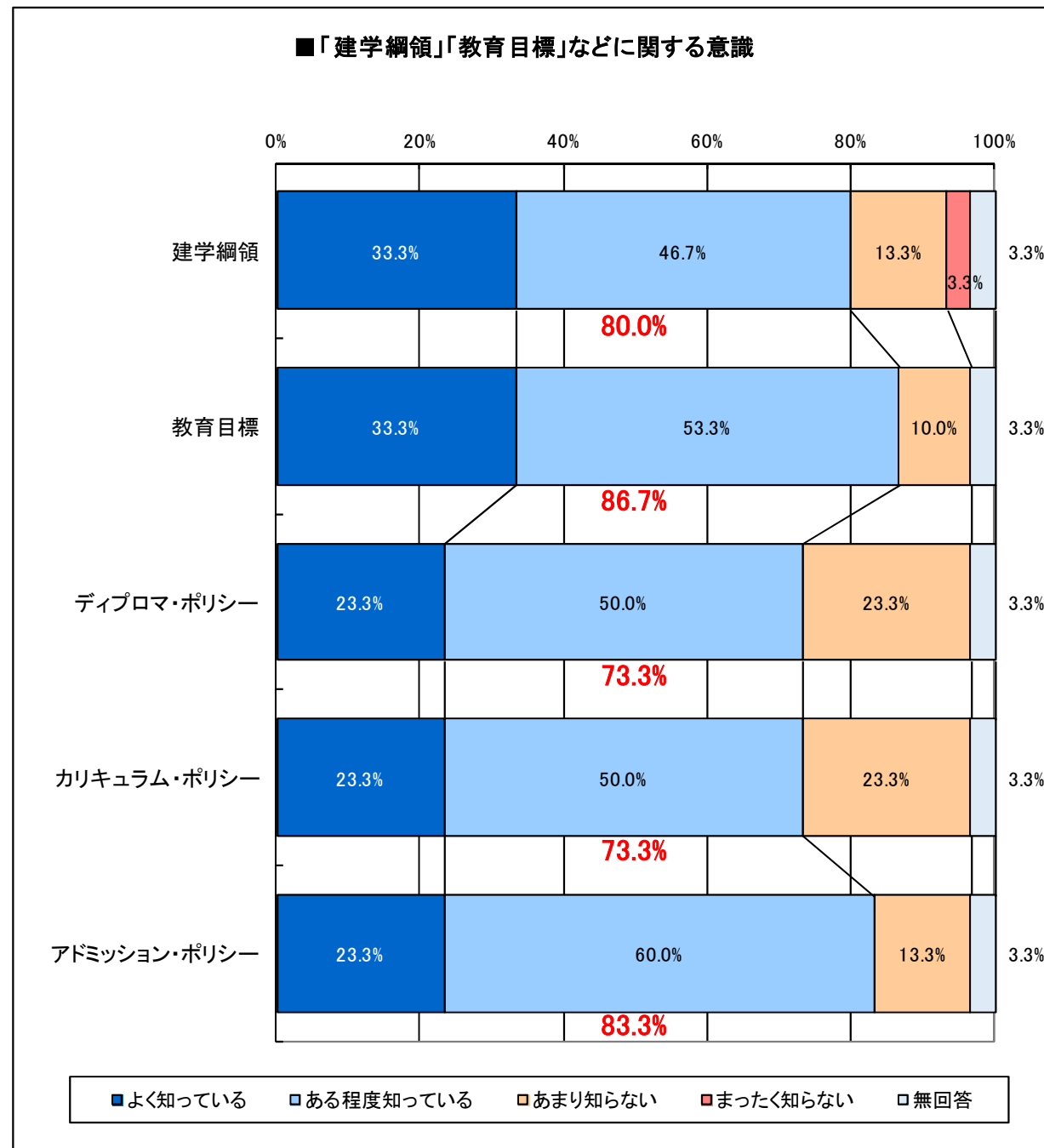
- 「FD/SD」に関して「教育能力開発に役立っている」の肯定的な意見は63.3%、「今後の教育能力向上に役立てたい」は80.0%となっていた。そして、後者では「思う」が36.7%と多かった。
- 加重平均で年度別に比較すると、2項目ともに前回を下回っていた。ただし、いずれも低下の幅はわずかであり、「FD/SD」に対する評価や期待は高い状態が続いていた。





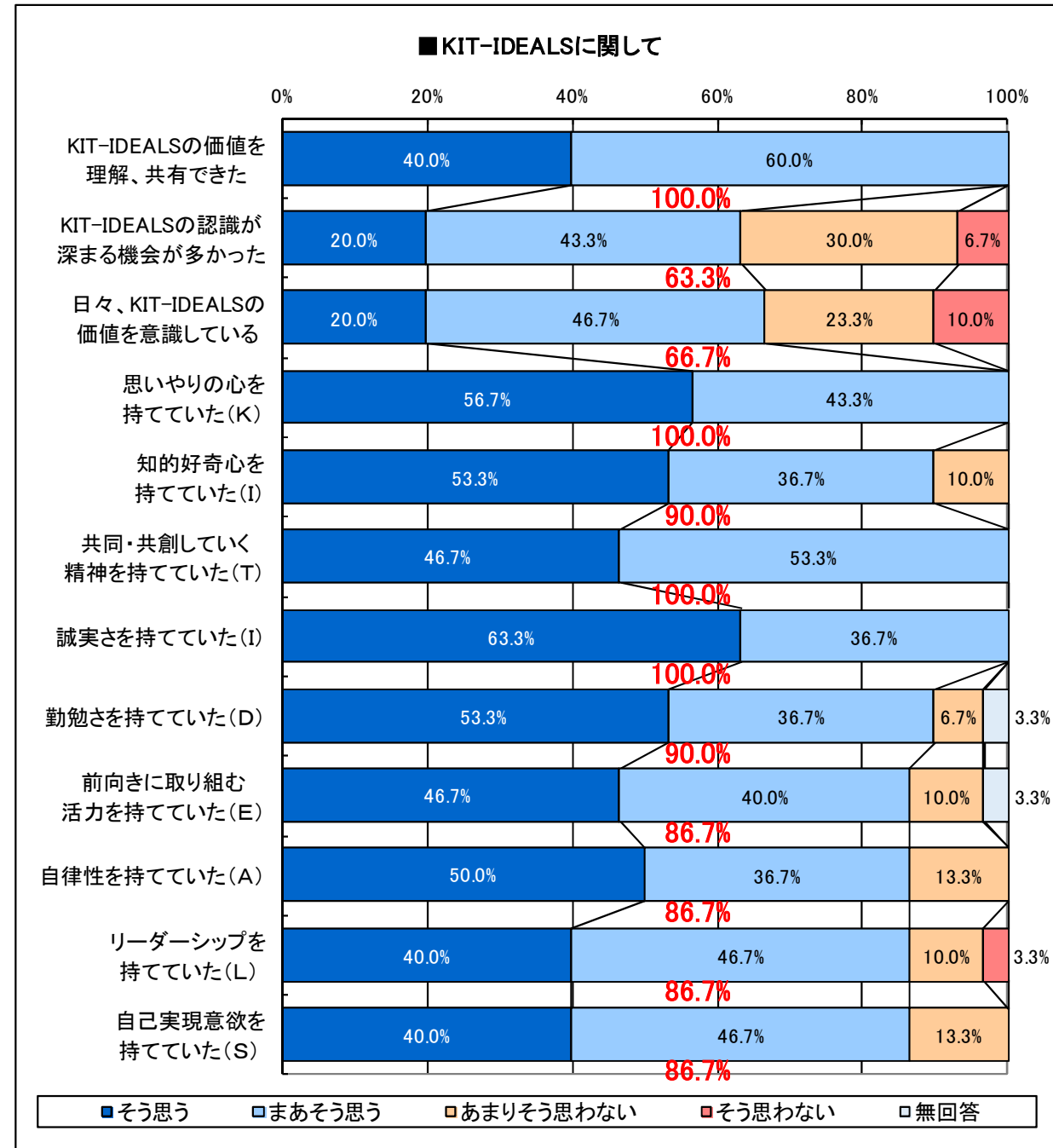
## 9)教職員の「建学綱領」「教育目標」などに関する意識

- 教職員の「建学綱領」の認知度は80.0%、「教育目標」は86.7%であった。
- ポリシーに関しては、「ディプロマ・ポリシー」と「カリキュラム・ポリシー」の認知度は73.3%、「アドミッション・ポリシー」は83.3%となっていた。



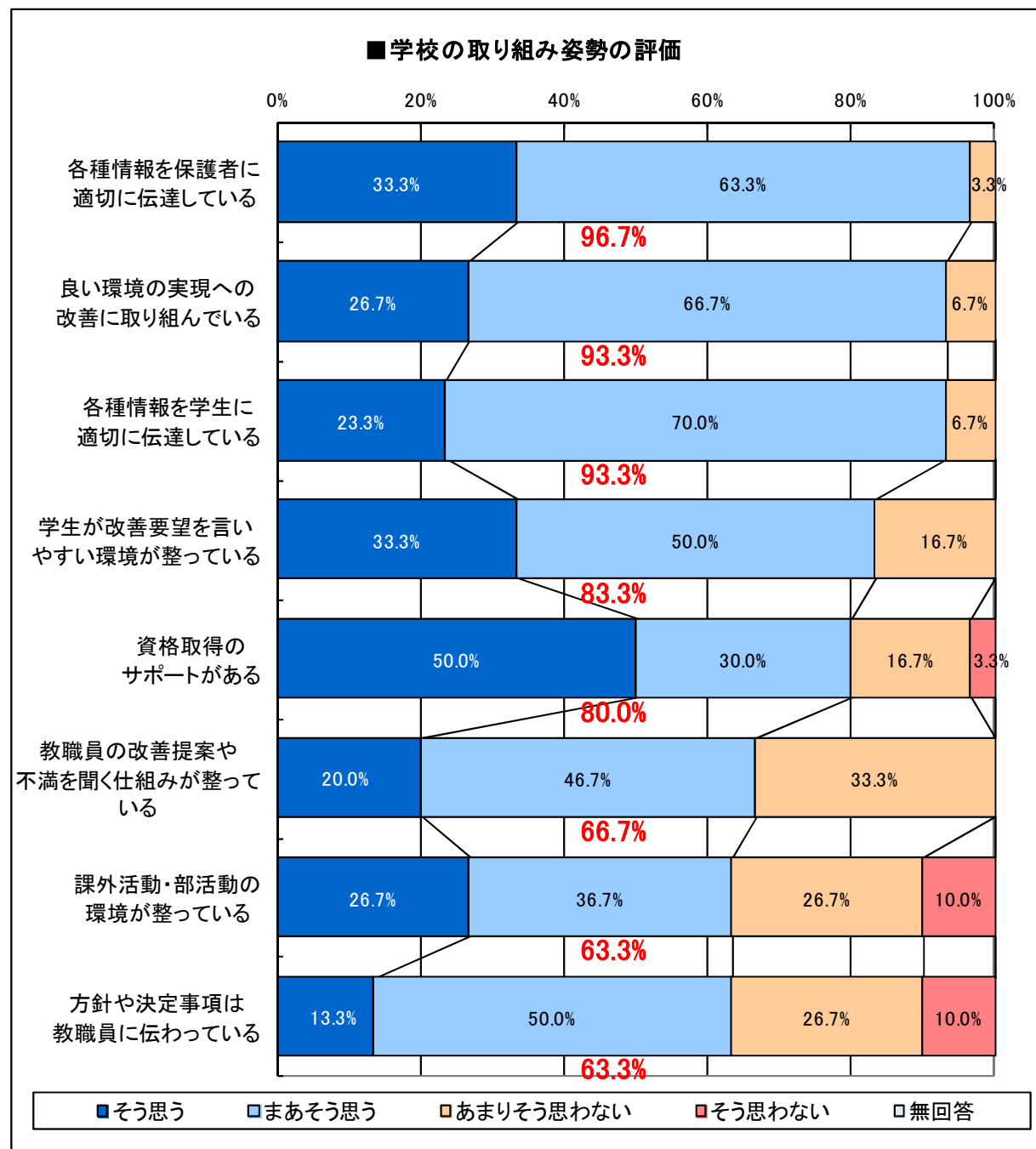
## 11)教職員のKIT-IDEALSに関する意識

- 「KIT-IDEALSに関する意識」として、まず、「KIT-IDEALSの価値を理解、共有できた」を見ると、100%が肯定的な意見であった。そして、「KIT-IDEALSの認識が深まる機会が多かった」は63.3%、「日々、KIT-IDEALSの価値を意識している」は66.7%となっていた。
- 「KIT-IDEALS」の9項目で肯定的な意見が多かったのは、「思いやりの心を持っていた(K)」「共同・共創していく精神を持っていた(T)」「誠実さを持っていた(I)」の100%であった。
- 一方、肯定的な意見が少なかったのは、「前向きに取り組む活力を持っていた(E)」「自律性を持っていた(A)」の86.7%であったが、これらも十分に高い数値と言える。



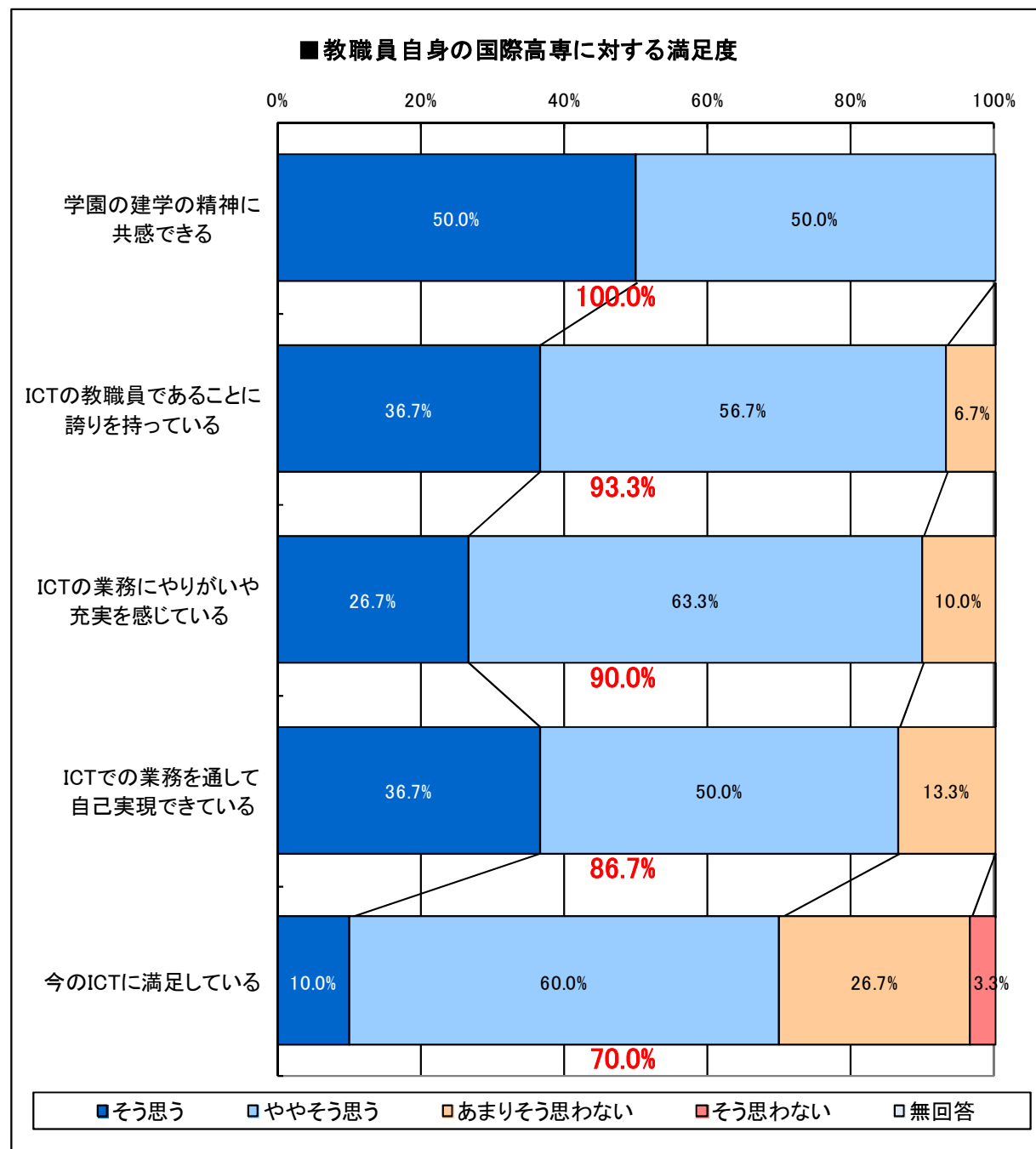
## 12) 学校の取り組み姿勢の評価

- 「学校の取り組み姿勢の評価」で肯定的な意見が最も多かったのは「各種情報を保護者に適切に伝達している」の96.7%であり、「良い環境の実現への改善に取り組んでいる」と「各種情報を学生に適切に伝達している」が93.3%で続いていた。
- 「資格取得のサポートがある」の肯定的な意見は80.0%ではあるが、「そう思う」が50.0%と非常に多く、しっかりとしたサポートができているという高い自己評価となっていた。
- 一方、肯定的な意見が最も少なかったのは「課外活動・部活動の環境が整っている」と「方針や決定事項は教職員に伝わっている」の63.3%で、いずれも「そう思わない」が10.0%とやや多く、不十分と感じている教職員も多いようであった。



## 14) 教職員自身の国際高専に対する満足度

- 教職員自身への「今のICTに満足していますか？」では、「ややそう思う」が60.0%と多いものの、肯定的な意見を合計すると70.0%が今のICTに満足していると答えていた。ただし、「あまりそう思わない」が26.7%、「そう思わない」が3.3%で否定的な意見が3割と多く、これらの不満を把握し、解消していくことが重要なポイントになると思われる。
- 最も肯定的な意見が多かったのは「学園の建学の精神に共感できる」であり、全員が共感できると答えていた。また、「ICTの教職員であることに誇りを持っている」が93.3%、「ICTの業務にやりがいや充実を感じている」が90.0%であり、帰属意識や愛校心は非常に高いものと思われる。



---

令和6年度

## ICT総合アンケート調査結果[報告書]

■ 発行日	令和7年11月1日
■ 発行者	国際高等専門学校
■ 調査票設計・分析	有限会社 アイ・ポイント
■ 編集	金沢工業大学企画部CS係

---

無断複製厳禁

再生紙を使用しています